

猶思ひなれにしゆふくれのなかにうちそひて

二才 11

たゝいまはかゝしくうちそふ人もなくて

三才 3

そへ(添)〔下二〕

△源氏▽

さるは月日にそへてたへしのふへきこゝちもせず

六才 2

空のあはれにひころのをこたりをとりそへて

三才 10

なみたをそふる水くきのあと

三ウ 7

そま(袖)

△曾丹集・日ボ▽

かゝるよもきかそまにくちはつへき契こそは

三才 6

そむけ(背)〔四〕

△源氏▽

かへにそむけるともしひのかけはかりを友として

二五才 4

そめ(染)〔下二〕

△源氏▽

いかにうつりいかにそめけるこゝろにか

一ウ 6

そめ(初)〔下二〕

△源氏▽

むめかえの色つきそめしはしめより

六才 10

うつゝ心もあらずあくかれそめにければ

二才 5

そら(空)

△源氏▽

れいの人しれすなかみちちかきそらにたに

三ウ 8

つこもり比の月なき空にあまくもさへたちかさなりて

七ウ 4

たゝいまの空のあはれにひころのをこたりをとりそへ

三才 9

ふりみふらすみさためなきころの空のけしきは

二才 6

暮はつる空のけしきも日ころにこえて心ほそくかなし

三ウ 6

そらおそろし(空恐)〔形〕

△源氏▽

かくても人にやみつけられんとそらおそろしければ

七ウ 7

それ(其)

△源氏▽

それとはかりも見をくりきこゆるはいとうれしくも

三才 11

かすみにそれとたに見えすへたゝり行も

二才 11

それかとみゆるくさ木もなし

二才 8

た

たえ(絶)〔下二〕

△源氏▽

たえてはとふるおほつかなさの

二才 8

みちのくのつほのいしふみかきたえて

二ウ 11

さすかにたえぬ夢の心ちは

二才 3

せきのし水もたえぬなみたとのみ思ひなされて

二才 7

わかれたたえぬなみたとそみる

二才 9

よひあか月のあかをとたえず

二ウ 5

↓とだえ(二例)

たえはて(絶果)〔下二〕

△源氏▽

心ならずも夢のかよひちたえ果ぬへし

二才 7

たかね(高嶺)

△万葉・日ボ▽

ひらのたかねやひえの山なとに侍る

三ウ 5

たがひ(違)〔四〕

△源氏▽

人の御さまそことたかひておはしけれ

二才 8

いひしにたかふつらさはしも

二才 9

たがへ(違)〔下二〕

△源氏▽

ちきりたかへぬしるへはかりにて

三ウ 9

たくる(闕)〔下二〕

△源氏▽

日たくるまゝにあめゆゝしくはれて

三ウ 3

たけ〔丈〕

△源氏▽

…と思ひけつゝころのたけそのおそろしかりける 一九ウ 2

たけ〔竹〕 ↓くれたけ〔二例〕

たし〔助動〕

△栄花・大文典▽

つれなきよのあはれさもみつからきこえあはせたく 四ウ 3

たすけあつかは〔助扱〕〔四〕

さま／＼にたすけあつかはるゝほと

たた〔絶〕〔四〕

△源氏▽

よひあか月のあかをたゝす

ただ〔唯〕〔副〕

△源氏▽

たゝいひしらぬなみたのみむせかへりたる

たゝそのおりの心ちして

たゝうちおもふ事をかきつくれと

たゝおもふことありて 四

たゝすこしうちなひきたるさへそゝろにうらめしき

ふしの山はたゝこゝもとにとそみゆる

たゝ一すちになきになしはてつる身なれば

はしもたゝひとつそみゆる

たゝしやうしひとへをへたてたる居ところなれば

れいのつまとをしあけてたゝひとりみいたしたる

山ちをたゝひとり行こゝちいといたくあやうく

たゝひとりうちふしたれとゝけてしもねられす

たゝあよみにあゆみよりて

ゆきたゝふりにふりくるに

ただいま〔唯今〕〔副〕

△源氏▽

たゝいまはか／＼しくうちそふ人もなくて 四

おしからぬ命もたゝ今そ心ほそくかなしき

たゝいまになりては心ほそきことのみおほかれと

たゝいまの空のあはれにひころのをこたりをとりそへ

たゝいまのいのちをかきる心ちして

人しれすなみをわけし事なと只いまのやうにおほえて 三オ 8

たゝ今もいてぬへきこゝちして

たたく〔叩〕〔四〕

△源氏▽

しのひやかにうちたゝくをきゝつけたるには

たち〔達〕〔接尾〕

△源氏▽

をこなひなれたるあまきみたちの

たち〔立〕〔四〕

△源氏▽

おりしもさきにたちたるくるまあり

まつかきくらす涙のみさきにたちて心ほそく

この川に水の出たちし世

↓おもひたち〔五例〕

松のこたちなと

いとゝわすれられぬるにやとみにもたゝれす

ものさはかしくなりければみさすやうにてたつ程

にはかにいそきたつ

まとのしとみたつものもおろさす

たちかくゝる〔立隠〕〔下二〕

△源氏▽

すいかいのおれのこりたるひまにたちかくゝも

三オ 1

九オ 9

一三ウ 8

八オ 4

一オ 5

六ウ 10

一八オ 6

八ウ 4

一九オ 11

二一オ 11

九ウ 7

七オ 8

三ウ 9

二〇ウ 5

二〇オ 7

二〇ウ 5

二〇オ 7

二〇ウ 3

二〇オ 7

二〇ウ 3

二〇オ 7

二〇ウ 3

二〇オ 7

二〇ウ 3

二〇オ 7

二〇ウ 3

たちかさなり(立重)〔四〕

△増鏡▽△源氏^{たちかさなり}

月なき空にあまくもさへたちかさなりて

三ウ4

たちかへり(立帰)〔四〕

△源氏▽

又たちかへらん事もかたければ

三オ9

又ふるさとにたちかへるにも

三四ウ8

たちど(立廻)

△源氏▽

外なるともし火のひかりなれば筆のたちとも見えす

セオ10

たちはな・れ(立離)〔下二〕

△源氏▽

たちはなれなんはさすかに心ほそくて

三〇ウ1

たちま・ふ(立舞)〔四〕

△源氏▽

日ころふりつるあめのなこりにたちまふ雲間の

三オ2

たちやすら・ひ(立休)〔四〕

△源氏▽

かきくれぬれば関屋ちかくたちやすらひたるに

三オ2

たちよ・る(立寄)〔四〕

△源氏▽

立よる人の御おもかけはしも

三オ9

たちわか・れ(立別)〔下二〕

△源氏▽

すみわひてたちわかれぬるふるさとと

一六ウ4

たづ・ね(尋)〔下二〕

△源氏▽

このやまのおくにたつぬへきことありて

九ウ8

しきりに身のありさまをたつぬれば

九ウ6

いつくにかとたつぬれば

三ウ5

たづねしる(尋知)〔四〕

△源氏▽

みやこ人さへおもひのほかにたつねしるたよりありて

三オ11

た・て(立)〔下二〕

△源氏▽

つまとは引たてつれと

三オ4

しほかまとものおもひくゝにゆかみたてたるすかた

三ウ10

たどたど・しき〔形〕

△源氏▽

たとくしきゆふやみにちきりたかへぬしるへはかり

三ウ8

たと・へ(譬)〔下二〕

△源氏▽

心ほそそなにくゝたとへてもあかすかなしける

三オ10

かなしきことそなにくゝたとふへしともおほえぬ

一六オ5

たどり(辿)〔四〕

△源氏▽

いたくもたとらずなりにしや

一ウ3

くらきよりくらきにたとらむなかき夜のまとひを

二オ9

夢ちをたとるやうにて日かすふるまゝに

一六ウ9

だに〔副助〕

△源氏▽

いける心ちたにせねは

三オ1

まつならぬ木すゑたにそゝろにはつかしくみまはされ

三四ウ9

さそふ水たにあらはと朝夕のこと草になりぬるを

一五オ7

ゆめたにゆるせおきつしらなみ

一五オ10

かたはらなる人うちみしろきたにせず

セウ9

かくとたに聞えさせまほしけれと

三オ4

身をはやくせのそことたにしらすまよはん

七オ11

かすみとそれとたに見えすへたゝり行も

一六オ11

ふし柴のたとにおもひしらさりける

一ウ8

身をかへたとおもひなしてたとにうきをわするゝ

一五ウ7

人しれすなかみちかきそらにたとくしき

三ウ8

せきもりのうちぬる程をたにいたくもととらずなり

一ウ2

かへらんほとを、たにしらぬ心もとなさに

けふりののちのくもを、たによもなかめしな

まちなれしふるさとを、たにとはさりし

たの・み(類)〔四〕

△源氏▽

人しれすたのみをかくるも

四ウ5

のちのおやとかのたのむへきことはりもあさからぬ

たの・むる(類)〔下二〕

△源氏▽

をのつからたのむる宵はありしにもあらず

一ウ10

たの・しき(類)〔形〕

△源氏▽

すくれてたのもしき心ちして

二ウ3

つとてに持たるはかりそたのもしきともなりける

一四オ2

…とおもふにはつかしくもたのもししくもなりぬ

六オ2

たのもしびと(類人)

△源氏▽

なかみちにれいのたのもし人にてすへりいてぬるも

四オ4

松かせのあら／＼しきをたのもし人にて

九オ5

たび(旅)

△源氏▽

われなからさためなくたひのはとも思ひしられされと

三ウ9

たび(度)

△源氏▽

いま一たひそれとはかりも見をくりきこゆるは

二三オ11

↓このたび(二例)

たび・ごろも(旅衣)

△源氏▽

ふるさともきてはくやしき旅ごろもかな

一六ウ5

たたび(度々)〔副〕

△源氏▽

したをたひ／＼ならしてあないとおし／＼と…いふそ

九ウ4

たひね(旅寝)

△源氏▽

こゝろからかゝるたひねになくとも

一九オ9

たふれい・り(倒入)〔四〕

△源氏▽

あるひは水にたふれいりなとするにも

一七オ8

た・へ(堪)〔下二〕

△源氏▽

さても猶うきにたへたるいのちのかきりありければ

一四ウ6

たへがた・き(堪難)〔形〕

△源氏▽

くるしくたへかたきとしぬはかりなり

八ウ6

たへしの・ぶ(堪忍)〔四〕

△百座法談・日ボ▽

さは月日にそへてたへしのふへきこゝちもせず

六オ3

いかにしてたへしのふへくもあらず

一三ウ5

たま・ひ(給)〔補動四〕

△源氏▽

きたのかた月ころわつらひ給けるかつゐにきえはて

給にければ

四オ7・7

日かすふるいふせさをかれ／＼そおとろかし給つる

四ウ2

仏などの見え給つるにや

六オ1

またくちろんなとをし給たりけるにか

九オ11

なにゆへ…この山なかへはいて給ぬるそ

九ウ2

おなしくそのあたりまでみち引たまひてんや

一〇オ1

御まへは人のてをにけいて給か

九オ11

つゐにこなたかなたへゆきわかれ給ほと

一三ウ3

時雨しぬへしはやかへり給へ

二ウ6

こゝにふし給へ

六ウ5

る中のすまゐもみつゝなくさみ給へかし

一五ウ2

ためし(例)

△源氏▽

さま／＼よのためしにもなりぬへく

二〇六

たゆたに〔副〕

△古今▽

ゆたのためたにものをもみおもひくちにしはては

二〇四

たより(便)

△源氏▽

おもひのほかにたつねしるたよりありて

二〇三

をのつからゝろの行たよりもや

二〇二

おもひかけぬたよりにて

二〇一

うき世の夢もをのつから思ひさますたよりにける

二〇〇

うきをわするゝたよりもや

一九九

たゝら(足)〔四〕

△源氏▽

思ふにもいふにもたらず

一九八

たゝり〔助動〕

△源氏▽

身のぬれとをりたること伊勢のあまにもこえたり

一九七

かしこましくおそろしきまでののしりあひたり

一九六

まへにはおほきなる川のとかなになれたり

一九五

かひのしらねにもいとしく見わたされたり

一九四

とりわきたりける御思ひのなこりもいとくるしく

一九三

よひには雲かくれたりつる月の

一九二

またくちろんなとをし給たりけるにか

一九一

いたつらものにてふしたりしを

一九〇

この川に水の出たりし世

八十九

たればかりにかとめとゝめたりければ

八十八

あめふりいてたりしそかし

八十七

つまとをしあけてたゝひとりみいたしたるあれたる

一〇六・六

庭の秋の露

かねのひゝきをつく／＼ときゝふしたるも

二〇一

帰てもいとくるしければうちやすみたるほと

二〇〇

御ふみとてとりいれたるも

一九九

こまやかにかななされたるすみつき筆のなかれも

一九八

たゝいひしらぬなみたのみむせかへりたるあか月

一九七

うきたる身のかもかうまては思ひしらすそ

一九六

さすかめもあはすみしろきふしたるに

一九五

しのひやかにうちたゝくをきゝつけたるには

一九四

すいかいのおれのこりたるひまにたちかくるゝも

一九三

御おもかけさへさしむかひたる心ちするに

一九二

たゝしやうしひとへをへたてたる居ところなれば

一九一

そきおとしたるかみをおしつゝみたるみちの国かみ

七〇七・八

の

打こはつくろふもむつかしときゝゐたるに

七〇六

あやしきものくるをしきすかしたるも

七〇五

身のぬれとをりたること伊勢のあまにもこえたり

七〇四

しぬへき心地さへすればこゝによりゐたる也

七〇三

をこなひなれたるあまきみたちの

七〇二

ほそき川のなかれたる水のまさるにや

七〇一

あれたる庭に

七〇〇

くれ竹のたゝすこしうちなひきたるさへ

六九九

おとろかしきこえたるにも

六九八

なをさりにかきすてられたるもいと心つくて

さきにたちたるくるまあり

つとてに持たるはかりそたのもしきともなりける

つくくとなかめいてたるに

ねにまよひたるこゝちするにも

さても猶うきにたへたるいのちのかきりありければ

やうく心ちもをこたりさまになりたるを

あらぬすまゐに身をかへたと詠

おもひくゝにゆかみたてたるすかたとも

みやこのともにもうちくしたる身ならましかは詠

あたりのくさもみなかれたるころなればにや

のとなるみつうみのをちいたるけちめに

はるくとおひつくきたる松のこたちなと

やまひになりてかきりになりたるよしを

とりのあとのやうにかきつくけておこせたるを

関屋ちかくたちやすらひたるに

なにをかなとゝめんと見出したるけしきも

こゝもかしこも猶あれまきりたる心ちして

ところくもりぬれたるさまなと

むねうちさはきてひきひろけたれば

やをらはしをあけたれば

かのところに行つきたれば

たゝひとりうちふしたれとゝけてしもねられす

くれはつるほとにゆきつきたれば

たれ(誰)

たれをよなく恋わたりけん詠

たれはかりにかとめとゝめかたければ詠

うき身をたれはかりかうまてしたはむ詠

ち

ち(道・路)

波あらきしほの海路

夢の通ひち

さすかならはぬひなのなかに

↓やまち(四例)

夢ちをたとるやうにて

ちかき(近)「形」

れいの人しれすなかみちちかきそらにたに

まくらにちかきかねのをとも

山のはちかきひかりのほのかにみゆるは

をたきのちかき所にて

ねやちかききりくすのこゑ

みやこはちかき心のみはかりにて

かとちかくほそき川のなかれたる

関屋ちかくたちやすらひたるに

けちかくとふへき人もなければ

うみいとちかければみなとのなみこゝもとにきこえて

ちかづく(近付)「四」

△源氏▽

一才3

一才7

三才3

△源氏▽

一才2

一才3・一才7

一才10

一才9

△源氏▽

三才8

四才1

五才7

三才3

三才2

三才1

三才5

二才2

一才7

一才11

△源氏▽

あらしの山のもとにちかつく程
ちかのしほがま (千賀塩竈)
〆枕〰
二ウ 7

ちかのしほがまといとかひなき心ちして
ちぎり (契) (四)
〆源氏〰
二ウ 9

人しれすちぎりしなかのことの葉を
あさましはかなかりける契りの程を
ちぎりたかへぬしるへはかりにて
〆源氏〰
三ウ 4

かゝるよもきかそまにくちはつへき契こそは
ちどり (千鳥)
〆源氏〰
三ウ 9

はま千とりむらゝにとひわたりて
ちひさき (小) (形)
〆源氏〰
三ウ 6

かのちいさきわらはにやしのひやかにうちたゝくを
人見わくへくもあらすちいさくかきつくれと
〆源氏〰
二ウ 2

ちりくる (散来) (力変)
おりゝにちりくることの葉もありしにこそ
〆古今〰
二ウ 5

つ
〆源氏〰
二ウ 10

つ (格助)
ゆめたにゆるせおきつしらなみ
月のすゑつかたにもなりぬ
とをつあふみとかやきくもはるけき道をわけて
〆源氏〰
二ウ 4

つ (助動)
〆源氏〰
二ウ 9

露のいのちをまかけてけふまでもなからへてけるを
〆源氏〰
二ウ 7

日かすふるいふせさをかれゝそおとろかし給つる
かしこくおもひしつめつるこゝろも
よひには雲かくれたりつる月の
〆源氏〰
二ウ 2

仏などの見え給つるにや
ひるよりよいしつるはさみはこのふたなどの
かきをきつる文なともとりくしてをかん
〆源氏〰
二ウ 6

いてつるしやうし口より
よなかよりふりいてつるあめの
たゝすちになきになしはてつる身なれば
〆源氏〰
二ウ 1

いまとちめはてつるいのちなれば
日ころふりつるあめのなこりに
かねてきゝつるよりもあやしくはかなげなる所の
〆源氏〰
二ウ 4

過ぎつる日かすのほとなきに
心ほそかりつるおもひにやまひになりて
つねにより居つるはしらのあらゝしきか
〆源氏〰
二ウ 7

なつかしからさりつるもたちはなれなんはさすかに
夜ふかくいてつれと
つまとは引たてつれと
〆源氏〰
二ウ 11

ついで (序)
手ならひのほんこなとやりかへすつめてに
をのつからことつめてに
物かたりなとするつめてに
〆源氏〰
二ウ 9

さるへきつるてもなくてみつからきこえさせす
〆源氏〰
二ウ 5

つから (接尾)
〆源氏〰
二ウ 6

〆源氏〰
二ウ 9

〆源氏〰
二ウ 4

〆源氏〰
二ウ 1

〆源氏〰
二ウ 6

心つからのなやましきもうれへきこえんとにやあらむ 二ウ 4

↓おのづから (六例)

↓みづから (二例)

つき

月もいみしくあかければ

よひには雲かくれたりつる月のうきくもまかはす…

ひかりのほのかにみゆるは七日の月なりけり

つこもり比の月なき空に

すてゝいてしものみやまの月ならて

まつかきくらす涙に月のかけも見えず

よのともとならひにける月のひかりまちいてぬれば

うつきにもなりぬ

神な月

かくてしも月のすゑつかたにもなりぬ

そゝろにつもりけむとし月のつみも

つき (付・着) (四)

…とことはりに思ひたちぬる心のつきぬるそ

木の葉のかけにつきて…山ちをたゝひとり行こゝち

やうく色つきぬ

むめかえの色つきそめしはしめより

みわたさるゝほととの道なればさはりなく行つきぬ

行つきたれば

おちつきところのさまをみれば

こまやかにかきなされたるすみつき筆のなかれも

△源氏▽

五オ 5

五ウ 6

五ウ 8

セウ 3

二オ 2

五ウ 11

一オ 4

四オ 5

二オ 5・五ウ 9

一ウ 4

二ウ 6

△源氏▽

六オ 5

八オ 3

一ウ 9

六オ 10

八オ 11

三ウ 4・三ウ 9

八ウ 4

三オ 11

あらしの山のふもとにちかつく程

つきかけ (月影)

なかむるかとおもかけそみし月かけは

まとかなる月かけに

かりのいほにこゝろはそくもやとる月かけ

つきくさ (月草)

つき草のあたなる色をかねてしらぬにしもあらざりし

つきころ (月比)

きたのかた月ころわつらひ給けるか

つきせす (尽) (連)

つきせす夢のこゝちするにも

つきせぬ涙のしつくはまとうつあめよりもなり

つきひ

月日にそへてたへしのふへきこゝちもせず

つくし (尽) (四)

心つくしなることのみまされは

つくづくと (副)

かねのひゝきをつくくときふしたるも

この御文をつくくとみるにも

つくくとなかめいてたるに

かくてつくくとおはせんよりは

つくくとしかたをみれば

つくくとかゝるよもきかそまにくちはつへき契…

つくよ (月夜)

△源氏▽

ハウ 7

二ウ 10

四オ 8

四オ 11

△源氏▽

一ウ 5

△源氏▽

四オ 6

△源氏▽

三ウ 10

△源氏▽

二オ 5

△源氏▽

六オ 3

△源氏▽

二オ 1

三ウ 3

四オ 7

一五ウ 1

一七オ 5

三オ 6

△源氏▽

雲間のゆふつく夜のかけほのかなるに

三才3

つくるふ〔作・繕〕〔四〕

△源氏▽

セウ6

とのゐ人さへ折しも打こはつくるふもむつかしと

△源氏▽

セウ6

こゝかしこにせぬれいのをとなどをきくにつけても

△源氏▽

二ウ6

しのひやかにうちたゞをきゝつけたるには

五才3

かくても人にやみつけれん

セウ7

ほとなくをくりつけてかへりぬ

二才4

↓うちつけに〔二例〕

△源氏▽

セウ3

↓かきつくる・かきつくれと〔二例〕↓かきつけ

△源氏▽

セウ3

つこもり比の月なき空に

△源氏▽

二ウ10

つた〔蕪〕

△源氏▽

セウ11

松にかゝれるつたの心の色も

△源氏▽

二ウ2

なけきつゝ身をはやきせのそことたに

△源氏▽

二ウ2

ゐ中のすまゐもみつゝなくさみ給へかし

△源氏▽

二ウ2

つづき〔続〕〔四〕

△源氏▽

二ウ2

ことの葉のつゝきも見えずなりぬれは

△源氏▽

二ウ2

はるゝとおひつゝきたる松のこたちなと

△源氏▽

二ウ2

つづけ〔続〕〔下二〕

△源氏▽

二ウ2

とりのあとのやうにかきつゝけておこせたるをみるに

△源氏▽

二ウ2

↓おもひつづけ・おもひつづくる〔七例〕

△源氏▽

二ウ2

つつまし〔慎〕〔形〕

△源氏▽

二ウ2

めはやき山かつもやとつゝましなから

二ウ3

つづみ〔包〕〔四〕

△源氏▽

セウ8

そきおとしたるかみをおしつゝみたるみちの国かみの

△源氏▽

セウ8

つと〔副〕

△源氏▽

セウ8

きやうつとてに持たるはかりそたのもしきともなり

△源氏▽

二才2

つね〔常〕

△源氏▽

二才2

よのつねならすあたなる身のゆくゑ

△源氏▽

二才2

つねよりめとゝまりぬらんかし

△源氏▽

二才2

つねよりもをとするこゝちするにも

△源氏▽

二才2

つねに〔常〕〔副〕

△源氏▽

二才2

つねにより居つるはしらのあらゝしきか

△源氏▽

二才2

つひに〔終〕〔副〕

△源氏▽

二才2

月ころわつらひ給けるかつるにきえはて給にければ

△源氏▽

二才2

身のゆくゑつるにいかになりはてんとすらん

△源氏▽

二才2

つるにこなたかなたへゆきわかれ給ほと

△源氏▽

二才2

つほのいしふみ〔壺碑〕

△源氏▽

二才2

みちのくのつほのいしふみかきたえて

△源氏▽

二才2

つま〔妻〕

△源氏▽

二才2

つましあればにや

△源氏▽

二才2

つま〔端〕

△源氏▽

二才2

物ことに心をいたましむるつまとなりければ

△源氏▽

二才2

かうらんのつまなるいはのうへにおりゐて

△源氏▽

二才2

そゝるにうらめしきつまとなるにや

△源氏▽

二才2

つまで〔妻戸〕

△源氏▽

二才2

れいのつまとをしあけて
つまとは引たてつれと

一オ5
三オ4

つみ(罪)

△源氏▽

そゝろにつもりけむとし月のつみも

二ウ6

つも・り(積)〔四〕

△源氏▽

何となくつもりにける手ならひのほんこなと

六オ8

聞えかはしけることのつもりにけるほとも

六ウ1

そゝろにつもりけむとし月のつみも

二ウ6

つゆ

△源氏▽

あれたる庭の秋の露

一オ6

おきわかれにし袖の露

四オ3

をく露のいのちまつまのかりのいほに

一四オ10

つゆ〔副〕

△源氏▽

露まところまれぬにやをらおきいてゝみるに

五ウ5

つゆのいのち(露命)

△後撰▽

露のいのちをもかけてけふまでもなからへてけるを

二ウ6

露のいのちの庭のあさちふ

一四ウ11

つゆばかり(露許)〔副〕

△源氏▽

すへてこゝちもうせて露はかりおきもあかられす

二オ9

つら・き(辛)〔形〕

△源氏▽

うき世の人のつらきいつはりにさへなひはてにける

二ウ7

つらさ(辛)

△源氏▽

日比のつらさはみなわすられぬるも

三ウ4

これやさはとふにつらさのかすゝに

三ウ6

いひしにたかふつらさはしも
つれなき〔形〕

四オ9
四ウ3

つれなきよのあはれさも
こよひはつれなくてやみなまし

四ウ10

て

て(手)

△源氏▽

ほとなく手にさはるもいとうれしくて

七オ1

あな心う御まへは人のてをにけいて給か

九オ10

手をひかへてみちひくなさけのふかさそ

一〇オ2

つとてに持たるはかりそたのもしきともなりける

一四オ2

て〔接助〕

△源氏▽

れいのつまとをしあけて

一オ5

心に乱れおつるなみたををさへて

一オ8

いとゝ袖のいとまなき心ちして

二オ7

たえてはとふるおほつかなさの

二オ8

すくれてたのもしき心ちして

二ウ3

このころそさかりと見えていとおもしろければ

二ウ8

いはのうへにおりゐて山のかたをみやれば

二ウ9

木々の紅葉色々に見えて

二ウ10

心の色もほかにはなる心地して

二ウ11

おりしも風さへ吹てものさはかしくなりければ

三オ2

むねうちさはきてひきひろけたれば

三オ9

ひころのをこたりをとりそへて

三オ10

なこりもいと心ほそくて 謡

：とまたうちをかれて

たゝいまのいのちをかきる心ちして

いとゝかこちかましくて

なかくきこえんかたなくて日かすふるいふせさを

こよひはつれなくてやみなまし 謡

いとはしたなきこゝちして

御さまそことたかひておはしけれ 謡

あなち思ひいてられて

心をやりておもひつゝくるに

ゆきかきくらしして風もいとすさまじき日

いとくおろしまはして

やをらおきいてゝみるに

たゝそのおりの心ちして

さるは月日にそへてたへしのおへきこゝちもせず

かの御文をとをとりいてゝみれば

うちとけて聞えかはしけることのつもりにけるほと

ともし火の残りに心ほそき光なるに

ほとなく手にさはるもいとうれしくて

このふたにうちいれて

かきをきつる文なともとりくしてをかんと 謡

かたはらにみゆるを引よせて

たゝ今もいてぬへきこゝちして

あまくもさへたちかさなりて

三ウ 3

三ウ 5

四オ 2

四オ 3

四ウ 1

四ウ 11

五オ 6

五オ 8

五オ 11

五ウ 1

五ウ 2

五ウ 3

五ウ 5

五ウ 9

六オ 3

六オ 9

六ウ 1

六ウ 9

七オ 2

七オ 4

七オ 4

七オ 7

七ウ 3

七ウ 4

もとのやうにிரりてふしぬれと

夜ふかくかとをあけていつるならひなりければ

こよひしもとくあけて出ぬるをとすれば

木の葉のかけにつきてゝ山ちをたゝひとり行こゝち

あしのゆくにまかせてゝうちもやすまぬまゝに

雨ゆゝしくふりまさりて

雲のいくへともなくおりかさなりてゆくさきも見えず

涙のあめさへふりそひてこしかた行ききも見えず

これもみやこのかたよりとおほえてみのかきなとき

てさえつりくる女あり

たゝあよみにあゆみよりて

なにゆへかゝるおほあめにふられてこの山なかへゝ 謡

いつくよりいつくをさしておはするそ 謡

したをたひゝならして

たゝおもふことありてこのやまのおくにたつぬへき

ことありて夜ふかくいてつれと

山ちさへまとひてこしかたもおほえず 謡

いよくゝいとおしかりて手をひかへてみちひく 二オ 2・2

ほとなくをくりつけてかへりぬ

すへてこゝちもうせて露はかりおきもあかられす 二オ 9

おもひのほかにたつねしるたよりありて 二オ 11

すてゝいてしもしのみやまの月ならて 謡

心はこゝろとして

ゆふくれのなかにうちそひて

セウ 8

セウ 10

セウ 11

ハオ 3

ハウ 5

ハウ 8

ハウ 9

九オ 2

九オ 6・7

九オ 10

九ウ 1

九ウ 2

九ウ 4

九ウ 7・8

九ウ 9

二オ 2・2

二オ 4

二オ 9

二オ 11

二オ 2

二オ 11

二ウ 1

露のいのちをまけてけふまでもなからへてけるを
いとかなき心ちして

つほのいしふみかきたえて

只いまのやうにおほえて

うきせをわけて中川の水

さるへきつゐてもなくてみつからきこえさせす

かきすてられたるもいと心うくて

其比こゝ地れいならぬことありて

はかなきやとりもとめてゝうつろひなんとす

とはすかたりもあやしくてなく／＼かとをひきいつる

さはなやかにおひてこせんなどこと／＼しくみゆる

日ころにこえて心ほそくかなし

ひとりうちふしたれとゝけてしもねられす

しるておもひつゝけてそゝたよりなりける

いさよひのひかり待いてゝ

そゝろにはつかしくみまはされて

なけきならはかなくすきて秋にもなりぬ

ともしひのかけはかりを友としてあくるをまつも

きくもはるけき道をわけてみやこの物まうてせんとて

身をかへたるとおもひなしてとたにうきをわするゝ

たゝいまになりては心ほそきことのみおほかれと

涙のみさきにたちて心ほそくかなしきことそ

たえぬなみたとのみ思ひなされて

あめかきくらしふりいてゝ

二ウ 6

二ウ 10

二ウ 11

三オ 8

三オ 10

三ウ 6

三ウ 7

三ウ 11

三オ 3

三オ 5

三オ 6

三ウ 6

三ウ 9

一四オ 3

一四オ 6

一四ウ 9

一五オ 1

一五オ 5

一五オ 10

一五ウ 7

一六オ 2

一六オ 4

一六オ 7

一六オ 11

すみわひてたちわかれぬるふるさとも

人のゆくにまかせて夢ちをたとるやうにて

われかのこゝちのみして

ゆきゝの人あつまりて舟をやすめすさしかへるほと

河のはたにおりゐてつく／＼とこしかたをみれば

何事にかゆゝしくあらそひて

いとゝなみたおちまさりてしのひかたく

おもひいてゝ名をのみしたふみやことり

はま千とりむら／＼にとひわたりて

思ふ事なくて

人しれぬ心の中のみさま／＼くるしくて

みやこいてゝはるかになりぬれば

みなとのなみこゝもとにきこえて

さまかはりていとおかしきさまなれと

雪いとしろくて

はかなくもみすてられて心ほそかりつるおもひにや

まひになりてかきりになりたるよしを

とりのあとのやうにかきつゝけておこせたるをみるに

あはれにかなしくてよろつをわすれていそきのほり

なんとするは

みちもいとこほりとちてゝあやうかるへきを

はか／＼しくうちそふ人もなくて

おもひわひてねのみなかるゝを

これかれとさためてのほるへきになりぬ

一六ウ 4

一六ウ 8

一六ウ 11

一七オ 2

一七オ 5

一七オ 8

一七オ 11

一七ウ 5

一七ウ 9

一八オ 1

一八オ 2

一八オ 11

一九オ 1

一九オ 3

一九オ 11

一九ウ 7・7

一九ウ 9

一九ウ 10・10

二オ 2

二オ 3

二オ 4

二オ 6

さすがに心ほそくて人見わくへくもあらず

三ウ2

またきてなるゝおりもこそあれ

三ウ5

わか心よりおもひたちていてぬれと

三ウ9

ふはのせきになりてゆきたゝふりにふりくるにかせ

三オ1・1

さへましりてふき行も

見出したるけしきもいとおそろしくて

三オ4

あめふりいてゝかゝみの山もくもりてみゆるを

三オ7・7

ゝと思ひいてゝ

三オ9

あめゆゝしくはれてしろき雲おほかる山おほかれは

三ウ4

猶あれまさりたる心ちして

三ウ10

おい人はうち見えてこよなくをこたりさまにみゆるも

三オ3

↓して・として・いかにして・からくして

↓とて (一二例)

↓にて (一七例)

↓かくて (六例)・さて(も) (四例)

↓かねて (二例)

しるておもひつゝけてそ

二四オ3

すくれてたのもしき心ちして

二ウ3

↓すべて (三例)

↓せめて (四例)

で

△源氏▽

かへりなんともいはてふしぬ

六ウ7

すゝりのふたもせて有けるかかたはらにみゆるを

七オ6

すてゝいてしものみやまの月ならて

二オ2

てける〔連・助動〕

△源氏▽

露のいのちをもかけてけふまでもなからへてけるを

二ウ7

てならひ〔手習〕

△源氏▽

手ならひのほんこなとやりかへすつゐてに

六オ8

ては〔連・助〕

△源氏▽

たゝいまになりては心ほそきことのみおほかれと

一六オ2

ふるさともきてはくやしき旅ころもかな

一六ウ5

このくにゝなりてはおほきなる川いとおほし

一七ウ7

てむ〔連・助動〕

△源氏▽

にはかにうつまきにまうてゝんとおもひ立ぬるも

二ウ1

身をもなけてんとおもひけるにや

七ウ2

おなしくそのあたりまでみち引たまひてんや

二オ1

ても〔連・助〕

△源氏▽

なにゝたとへてもあかすかなしかりける

二オ10

帰てもいとするしければうちやすみたるほと

三オ7

こゝかしこにせぬれいのをとなとをきくにつけても

二ウ6

とてもかくてもねのみなきかちなり

一六ウ2・2

と

と(戸) ↓つまど (二例)

と〔格助〕

△源氏▽

よとゝにもおもひいづれは

二ウ2

こわらはのおなしこゑなるとものかたりする也けり

九オ8

なにと又みやこへかへるらむとあきなくものうし

三オ8

たれはかりかうまでしたはむとあはれもあさからす
うき人しもとあやにくなるこゝちすれば

三才4
三才4

人わろき心の程やとまたうちをかれて
はや山ふかく入なんとうちもやすまぬまゝに
いまはどうちやすむほと

三ウ5
二才8

…と我心のみそかへすうらめしかりける
有し夢のしるしにやとうれしかりける

一才11
六才5

仏の御しるへにやとまてうれしくありかたかりける
されはさらんとすこしおかしくなりぬ

二才3
一才10

人やおとろかんとゆしくおそろしけれと
人におみつけられんとそろおそろしければ

六ウ10
セウ7

人のおもふらんことゝかたはらいたければ
何と思ひたちけんとかやしきことかすしらす

一九ウ11
一六ウ2

身ならましかはと人しれぬ心の中のみゝくるしくて
けふかあすかと心ほそきいのちなから

一四才1
一四才5

身の行ゑにかと心ほそきことのみおほかれと
いかなるにかとさすかめもあはすみしろきふしたるに

一六才2
一五才1

めはやき山かつもやとつゝまじなから
せかいふらうことあるところをしるておもひつゝけて

二〇ウ3
一四才3

きた山のおもといふ所なれば
あふみのくにのちといふところより

一六才10
一八才5

みかはのくにやつはしといふ所をみれば
ひえの山なとに待るといふをきくに

二〇ウ6
九ウ4

あなといとおしくとくりかへしいふそうれしかりける

おなしくそのあたりまでみち引たまひてんやといへば
…といえはえにかなしきことおほかりける

二〇才1
六才6

身をもなけてんとおもひけるにや
きえかへりまたはくへしとおもひきや

七ウ2
一四ウ10

…と思ひいつるにたゝそのおりの心ちして
いかにせましとおもひいつるにそ

五ウ9
二〇ウ7

あめふりいてたりしそかしと思ひいてゝ
いつるをかきりにとおもひかへすそ

三才9
二ウ2

うへなきものはと思ひつけゝるのたけそ
くちはつへき契こそはと…おもひしつむれと

一九ウ2
三才7

ふし柴のとたにおもひしらさりける
うつまさにまうてゝんとおもひ立ぬるも

一ウ8
二ウ1

…とことほりに思ひたちぬる心のつきぬるそ
うきをわするゝたよりもやとあやなく思ひたちぬ

六才4
一五才7

…とおもひつゝくるにも
…と心ほそく思ひつゝくるにも

三才6
四ウ7

…と心をやりておもひつゝくるに
あらぬすまゐに身をかけたるとおもひなして

五才11
一五才6

たえぬなみたとのみ思ひなされて
いまはかくにこそとおもひなりぬるよの心ほそき

一六才7
二才9

今はとものをおもひなりにしも
…ととりわきたりける御思ひのなこりも

六才6
四才10

…とおもふにはつかしくもたのもしくもなりぬ
かゝるところもありけりとすこくおもふさまなるに

六才1
二〇ウ3

はるかにこそはなりゆくらんとおもふには
けにみやもわらやもとおもふには

これもみやこのかたよりとおほえて

つねよりもめとまりぬらんかしとおほゆるほとに
あなむつかしとおほゆれと

…とおほゆれと

かきつはたおほかる所ときゝしかとも

折しも打こはつくるふもむつかしときゝゐたるに
かくとたに聞えさせまほしけれと

さそふ水たにあらはと朝夕のこと草になりぬるを

これかれとさためて

あやし／＼とさへつる

身をはやきせのそことたにしらすまよはん

つるにいかになりはてんとすらん

はかなきやとりもとめてゝうつろひなんとす

かきをきつる文なともとりくしてをかんとするほと

夜ふかくみやこをいてなんとするに

いそきのほりなんとするは

いつくにかとたつぬれは

いとあやしととかむる人もあれは

はる／＼きぬとなけきけんも

ねぬよのともとならひにける

心をいたましむるつまとなりければ

はるけきなかとなりけるかな

一七〇 10

一八ウ 9

九オ 6

六ウ 3

六ウ 6

三ウ 10

一八オ 7

七ウ 6

三オ 4

一五オ 7

三〇オ 6

九ウ 3

七オ 11

四ウ 6

三オ 3

七オ 4

一五ウ 9

一八ウ 10

二ウ 5

八ウ 2

一八オ 9

一オ 4

一オ 7

三オ 1

そゝるにうらめしきつまとなるにや
人々もこしやむまと待いつるほと

紅葉このころそさかりと見えて

かすみにそれとたに見えす

かつらのさとの人ならんとみゆるに

それかとみゆるくさ木もなし

なにかなとゝめんと見出したるけしきも

それとはかりも見をくりきこゆるは

…とみおとろく人おほかるらめなれとも

今はとみるはあはれあさからぬなかに

あはらやのきならんとそゝるにみるもあわれなり

たればかりにかとめとゝめかたければ

身をかへたるとおもひなしてとたに

なやましさもうれへきこえんとにやあらむ

なにといふ心にか

何となく

なにと又みやこへかへるらむと

つと手にもちたるはかりそ

きとむねふたかる心ちするを

しほ／＼とぬるゝほとになりぬ

↓つくづくと(六例)・はるばると(二例)

ひろ／＼とおひたゝしき河あり

夜もやう／＼ほの／＼とするほとに

と(所・処) ↓たちど

二ウ 1

一七オ 4

二ウ 7

一六オ 11

九オ 9

一八オ 8

二オ 4

三オ 11

二〇オ 5

六ウ 2

三オ 2

一五ウ 7

二ウ 4

九ウ 3

六オ 8・一五オ 11

二〇オ 7

一四オ 2

一四ウ 2

一八オ 9

一七オ 1

一七オ 1

八ウ 1

ど〔接助〕

△源氏▽

かねてしらぬにしもあらざりしかと
 おきふしなかもわふれと
 仏の御心の中はつかしけれと
 すみつき筆のなかれもいとみところあれと
 いとくるしくをしはかり聞ゆれと
 人の御さまそこたかひておはしけれと
 夜もいたく更ぬとて人はみなねぬれと
 あなむつかしとおほゆれと
 ゆゝしくおそろしけれと
 たゝうちおもふ事をかきつくれと
 もとのやうにいりてふしぬれと
 からうしてほうりんのまへすきぬれと
 夜ふかくいてつれと^四
 いとせめてかなしけれと
 人しれすかきなかせと
 をしあけかたならねと
 つまとは引たてつれと
 …とおほゆれと
 かくとたに聞えさせまほしけれと
 かくとはおほしよらさらめと
 たゝひとりうちふしたれとゝけてしもねられす
 日ころふれととひくる人もなく
 なをさりなくいさなへと

一ウ 6
 二オ 7
 ニウ 2
 三オ 11
 四オ 11
 五オ 9
 五ウ 5
 六ウ 6
 六オ 9
 七オ 9
 七ウ 8
 八ウ 10
 九ウ 9
 一オ 10
 二ウ 3
 三オ 3
 三オ 5
 三ウ 10
 三オ 4
 三オ 10
 三ウ 9
 一オ 1
 一五ウ 4

心ほそく思ひわつらはるれと
 人はみなおきさはけと
 心ほそきことのみおはかれと
 みちのほとめとゝまる所々おはかれと
 人みなわたりはてぬれと
 恋しきこともさまゝなれと
 …となけきけんも思ひ出らるれと
 さすかにせはからねと
 かりそめなれと
 いとおかしきさまなれと
 ゆめのまへにあはれなれと
 いとうれしけれと
 人見わくへくもあらすちいさくかきつくれと
 いと人すくなに心ほそけれと
 わか心よりおもひたちていてぬれと
 たひのほとも思ひしられされと
 かくおもひつゝくれと
 身をも世をもおもひしつむれと
 われよりはひさしかるへきあとなれと^四
 とか〔連・助〕
 のちのおやとかのたのむへきことはりもあさからぬ
 とが〔答〕
 うきたる身のとかもかうまでは思ひしらすそすき^四
 とがめ〔答〕〔下二〕
 △源氏▽
 一五ウ 6
 一六オ 1
 一六オ 3
 一六ウ 6
 一七オ 4
 一七ウ 3
 一八オ 10
 一八ウ 6
 一八ウ 8
 一九オ 3
 一九ウ 2
 二〇オ 7
 二〇ウ 2
 二〇ウ 6
 二〇ウ 9
 二〇ウ 10
 二一ウ 1
 二一オ 7
 二一オ 9
 二一オ 8
 二一ウ 8
 二二ウ 8
 △源氏▽
 二二ウ 8

山人のめにもとかめぬまゝに
いとあやしととかむる人もあれば

八才5
八ウ2

とかや〔連・助〕

△源氏▽

またくちろんとかやをもせず圖

九ウ7

とをつあふみとかやきくもはるけき道をわけて

一才9

すのまたとかやひろくとおひたしき河あり

一才1

とき〔時〕

△源氏▽

をのつからおもひしつむる時なきにもあらねは

一才7

しほのさすときはこの河の水さかさまになるゝゝ

一才1

とく〔疾〕〔形〕

△源氏▽

いととくおろしまはして

五ウ3

とくあけて出ぬるをとすれば

七ウ11

とけ〔解〕〔下二〕

△源氏▽

たゝひとりうちふしたれとゝけてしもねられす

一三ウ9

うちとけて聞えかはしけることのつもりにけるほとも

六ウ1

とげ〔遂〕〔下二〕

△源氏▽

ひとひにほいとけにしかはゝうちもうれしく思ひゝ

二ウ1

ところ〔所〕

△源氏▽

かのところにはむめきたのかた月ころろわつらひ給ける

四才6

きた山のふもとゝいふ所なれば

八才2

かのところにし山のふもとなれば

八才7

まちとるところにもゝみおとろく人おほかるらめ

一才4

さてこの所をみるにうき世なからかゝるところもあ

りけりとすこくおもふさまなるに

二ウ2・3

かゝらぬところにてやみなましはいかにせまし圖

一〇ウ7
一才3

をたきのちかき所にて

一才3

かのところに行つきたれば

一才3

あやしくはかなげなる所のさまなれば

一才3

せかいふらうことあるところをしめておもひつゝけて

四才3

あふみのくにのちといふところより

一才10

みかはのくにやつはしといふ所をみれば

一才5

かきつはたおほかる所ときゝしかとも

一才7

はまなのうらそおもしろきところなりける

一才1

日かすもうららかにてとゝこぼる所もなかりけるを

二ウ11

おちつきところのさまをみれば

一才4

いとみ所おほかるに・いとみところあれと

二ウ11・一才11

たゝしやうしひとへをへたてたる居ところなれば

六ウ11

ところから

△源氏▽

またかなる月かけに所からあはれすくなからす

一才8

ところせう〔所狭〕〔形〕

△源氏▽

いとゝころせうかしこましくゝのしりあひたり

一才2

ところどころ〔所々〕

△源氏▽

みちのほとめとゝまる所々おほかれと

一才6

ところゝもりぬれたるさまなど

二ウ10

とし〔年〕

△源氏▽

いつのとしにかあらんこの川に水の出たちし世

一才6

としふりにけるしほかまともゝゆかみたてたる

一才9

としつき〔年月〕

△源氏▽

そゝろにつもりけむとし月のつみも

として〔連〕

△源氏▽

二〇ウ 6

心はこゝろとして猶思ひなれにしゆふくれのなかに二〇才 11

ともしひのかけはかりを友としてあくるをまつも 二五才 5

とぞ〔連・助〕

△源氏▽

今さらにとりはものかはとそおもひしられる 二〇才 2

雲井はるかに心を送るしるへとそなりにける 二〇才 1

わかれにたえぬなみたとそみる 二六才 9

ふしの山はたゝこゝもとにとそみゆる 一九才 11

とだえ〔跡絶〕〔下二〕

△源氏▽

一夜はかりのとたえもあるましきやうにならひにける 一ウ 4

ふし柴のとたえにおもひしらさりける 一ウ 8

よひあか月のあかをとたえす 二〇ウ 5

とち〔閉〕〔上二〕

△源氏▽

みちもいとこほりとちてさはりかちにあやうかるへき 二〇才 2

とちめはて〔閉果〕〔下二〕

いまとちめはてつるいのちなれは 九才 3

とて〔連・助〕

△源氏▽

御ふみとてとりいれたるもむねうちさはきて 三才 8

夜もいたく更ぬとて人はみなねぬれと 五ウ 4

月のかけも見えずとてとおもふにはつかしくも 六才 1

こゝにふし給へとて我かたへもかへらすなりぬ 六ウ 5

をのつからこゝろの行たよりもやとてかきなかせと 二ウ 3

よもなかせしな人めもるとて 三ウ 9

かくてしもやとて又ふるさとにたちかへるにも

みやこの物まうてせんとてのほりきたるに 二四ウ 8

みる人も心くるしくとてとすへきものともなと 二五才 10

さりとてとまるへきにもあらねは 二〇才 5

何とて思ひたちけん 二六才 3

こゝとても又たちかへらん事もかたければ 二ウ 1

とてもかくても〔副〕 二〇才 8

とてもかくてもねのみなきかちなり 二六ウ 2

とどこほる〔滞〕〔四〕 二〇ウ 11

日かすもうららかにてとどこほる所もなかりけるを 二〇ウ 11

とどまり〔留〕〔四〕 二六ウ 3

つねよりもめとまりぬらんかしとおほゆるほとに 二六ウ 3

いかなるにか心とまりす日かすふるまゝに 一九才 4

さりとてとまるへきにもあらねは 二六才 3

なに心とまるへくもあらぬをみやるも 二ウ 11

みちのほとめとまる所々おほかれと 二六ウ 6

とどめ〔留〕〔下二〕 二六ウ 6

たればかりにかとめとめたりければ 二〇才 7

なにをかなとめん 二〇才 4

さまくとむる人もおほかりければ 二〇才 3

やかてとむるふはのせきもり 二〇才 6

とにかくに〔副〕 二〇才 4

とにかくにさはりかちなるあしわけにて 二〇才 11

三日はかりはとにかくにさはりしかとも 二〇才 11

とにかくにさはるへきこゝ地もせねは

三〇一

とにかくにおもひわけにし事なく圖

三〇七

とのゐびと(宿直人)

△源氏▽

とのゐ人さへ折しも打こはつくろふも

七ウ5

とのゐ人の夜ふかくかとをあけていつるならひなり:

七ウ9

とは(連・助)

△源氏▽

あらしふけとはおもはさりしを圖

三〇五

かくとはおほしよらさらめと

三〇九

とばかり(副)

△源氏▽

とはかりこしかたゆくさきを思ひつゝくるに

一〇八

とはすがたり(不問語)

△源氏▽

とはすがたりもあやしくてなくくかとをひきいつる

三〇四

と・ひ(問・訪)(四)

△源氏▽

まちなれしふるさとをたにとはさりし圖

二ウ4

これやさとはふにつらさのかすくに圖

三ウ6

けちかくとふへき人もなければ

一六ウ7

すみたかはらならねはことゝふへきみやことりも:

一七ウ3

とひくる(訪来)「力変」

△寢覺▽

日ころふれととひくる人もなく心ほそきまゝに

一四〇一

とびわた・り(飛渡)「四」

△拾遺・日ボ▽

はま千とりむらゝにとひわたりて

一七ウ9

とふのすがごも(十編菅薦)

△堤中納言▽

しきもさためぬとふのすかごもに:うちふしたれと

一三ウ8

とほざかる(遠離)「四」

△源氏▽

おもふかたにはとをさかるらむ圖

一八〇四

とほつあふみ(遠江)

△万葉▽

とをつあふみとかやきくもはるけき道をわけて

一五〇九

とほ・り(透)「四」

△源氏▽

身のぬれとをりたること伊勢のあまにもこえたり

九〇四

かせのをともすさましく身にしみとをる心ちするに

一五ウ11

とまり(止・泊)「四」

△源氏▽

とまりもしらす人のゆくにまかせて

一六ウ8

とまる人々の行すゑをおほつかなく

一七ウ2

むすひをけるへたてともゝかけとまるへくもあらず

一八ウ8

とみに(頓)「副」

△源氏▽

ふるさとはいとゝわすられぬるにやとみにもたゝれす

三〇一

とも(友・伴)

△源氏▽

ねぬよのともとならひにける月のひかりまちいて:

一〇四

ともなる人々時雨しぬへしはやかへり給へなといへは

二ウ5

宵ねすへきともゝなければ

一三ウ7

つとてに持たるはかりそたのもしきともなりける

一四〇二

かへにそむけるともしひのかけはかりを友として

一五〇四

みやこのともにもうちくしたる身ならましかは

一八〇一

ともすへきものともなとこれかれとさためて

二〇〇五

とも(連・助)

△源氏▽

かへりなんともいはてふしぬ

一六ウ7

すへてうつゝのことゝもおほえす

一八〇七

同じ世ともおほえぬまてにへたゝりはてにければ

二ウ8

かなしきことそなにゝたとふへしともおほえぬ
君やこしともおもひわかれぬなかみちに

一六〇五

四〇四

こゝはいつくゝともけちかくとふへき人もなければ

一六〇七

雲のいくへともなくおりかさなりてゆくさきも見えず

一六〇八

草まくらむすふともなきうたゝねのゆめ

一六〇九

よまずからやむともなきゝぬたの音

一六一〇

しのはぬ人はあはれともみし

一六一一

夢うつゝともわきかたかりし宵のまより

一六一二

かゝるたひねになけくともゆめたにゆるせ

一六一三

ども〔共〕〔接尾〕

△源氏▽

一六一四

かの御文ともをとりいてゝみれば

一六一五

あさましけなるしつのをともむつかしけなるものと

一六一六

もを舟にとりいれなとする程

一六一七

あまのしわざにしふりにけるしほかまとものおも

一六一八

ひゝにゆかみたてたるすかたともみなれす

一六一九

すこくをろかなるいゑるとものなかにはおなじかや

一六二〇

ゝともなとさすかにせはからねと

一六二一

むすひをけるへたてともゝかけとまるへくもあらず

一六二二

ふみとものおまたあるをみれば

一六二三

ども〔接助〕

△源氏▽

一六二四

ものおもふ事のなくさむにはあらねとも

一六二五

三日はかりはとにかくにさはりしかとも

一六二六

かきつはたおほかる所ときゝしかとも

一六二七

みおとろく人おほかるらめなれともかつらのさと人

一六二八

のなさけにをとらめやは

一六二九

ともかくも〔副〕

△源氏▽

こゝなからともかくもなりなはわつらはしかるへけれ

一六三〇

ともしび〔燈〕

△源氏▽

ともし火の残りて心ほそき光なるに

一六三一

外なるともし火のひかりなれば筆のたちとも見えす

一六三二

かへにそむけるともしひのかけはかりを友として

一六三三

ともに〔共〕〔連〕

△源氏▽

よとゝもにおもひいつれはくれたけの

一六三四

みやこのかたよりもともにふみとものおまたあるを

一六三五

とり〔鳥〕

△源氏▽

今さらにとりはものかはとそおもひしられける

一六三六

はま千とりむらゝにとひわたりて

一六三七

↓みやこどり〔二例〕

△源氏▽

ととり〔取〕〔四〕

一六三八

せきもりのなつかしからぬおもゝちとりにくゝ

一六三九

ととりい〔取出〕〔下二〕

△源氏▽

かの御文ともをとりいてゝみれば

一六四〇

とりいれ〔取入〕〔下二〕

△源氏▽

御ふみとてとりいれたるもむねうちさはきて

一六四一

むつかしけなるものともを舟にとりいれなとする程

一六四二

とりぐし〔取具〕〔サ変〕

△源氏▽

かきをきつる文なともとりくしてをかんとするほと

三才4

とりそへ〔取添〕〔下二〕

△源氏▽

空のあはれにひころのをこたりをとりそへて

三才10

とりのあと〔鳥跡〕

△源氏▽

とりのあとのやうにかきつゝけておこせたるをみるに

二九ウ8

とりわき〔取分〕〔四〕

△源氏▽

…とりわきたりける御思ひのなこりもいとくるしく

四才10

な

な〔名〕

△源氏▽

おもひいてゝ名をのみしたふみやことり

一七ウ5

な〔終助〕

△源氏▽

よもなかめしな人めもるとて

三ウ9

わするなよ

三〇ウ4

はかなしなみしかき夜半の草まくら

三三ウ10

な〔助動ぬノ未然形〕

△源氏▽

こゝなからともかくもなりなはわつらはしかるへけれ

三才1

↓なまし・なむ

なか〔中〕↓うち

△源氏▽

人しれすちきりしなかのことの葉を

三才4

あはれあさからぬなかに

六ウ2

はるけきなかなりにけるかな

三才1

すこくをろかなるゐるゑものなかに

一八ウ6

この山なかへはいて給ぬるを

九ウ1

よなかよりふりいてつるあめの

八才8

ゐ中のすまるもみつゝなくさみ給へかし

三ウ1

なががは

△源氏▽

うき世をわけて中川の水

三才10

ながき〔長〕〔形〕

△源氏▽

ななき夜のまとひをおもふにも

二才9

ななきおもひのよもすからやむともなきゝぬたの音

三才1

ながせ〔流〕〔四〕

△源氏▽

こゝろの行たよりもやとて人しれすかきなかせと

二ウ3

ながち〔長道〕

△万葉▽

さすかならはぬひなのなかに

一六ウ10

なかなか〔副〕

△源氏▽

れいのなか／＼かきみたすこゝろまよひに

三ウ1

あはれしるこゝろのほとなか／＼きこえんかたなくて

四ウ1

かくてしもなか／＼にしもあらぬさまなり

一八ウ9

なかみち〔中道〕

△源氏▽

れいの人しれすなかみちちかきそらにたに

三ウ8

君やこしともおもひわかれぬなかみちに

四才4

ながめ〔眺〕〔下二〕

△源氏▽

ひるはひめもすになかめよるは夜すからものをのみ…

三才5

猶思ひなれにしゆふくれのなかめにうちそひて

二才11

きみもさはよそのなかめやかよふらん

三ウ7

よもなかめしな人めもるとて

三ウ9

なかむるかとおもかけそみし月かけは

一〇ウ10

ながめいで(眺出)〔下二〕

△源氏▽

ものもおろさすつくくとなかめいてたるに

一四オ7

ながめわぶれ(眺佐)〔上二〕

△源氏▽

袖のいとまなき心ちしておきふしなかもわふれと

二オ7

ながら(援助)

△源氏▽

またほとふるもことほりなからいひしにたかふつらさ

一四オ8

ありしなからの心ならましかは

一四ウ7

うきくもまかはすなりなから山のはちかきひかりの

一五ウ7

うき世なからかゝるところもありけり

一〇ウ2

おもひなからのみなんさるへきつゐてもなくて

二ウ5

こゝなからともかくもなりなは

一三オ1

はつかしくはしたなきこゝちしなからいま一たひ

一三オ11

けふかあすかと心ほそきいのちなから

一四オ5

なけきなからはかなくすきて秋にもなりぬ

一五オ1

めはやき山かつもやつゝましなから

二〇ウ3

↓われながら(二例)

ながら・へ(長)〔下二〕

△源氏▽

露のいのちをもちけてけふまでもなからへてけるを

二ウ7

なが・れ(流)〔下二〕

△源氏▽

かちちかくほそき川のなかれたる

一三オ5

まへにはおほきなる川のとかななかれたり

一八ウ11

すみつき筆のなかれもいとみところあれと

一三オ11

この河の水さかさまになかるゝやうにみゆるなど

一九オ2

な・き(泣)〔四〕

△源氏▽

とてもかくてもねのみなきかちなり

一六ウ3

あとなきなみにねをやなまし

一七ウ6

おもひわひてねのみなかるゝを

二〇オ4

な・き(無・亡)〔形〕

△源氏▽

いとゝ袖のいとまなき心ちして

二オ7

すへて思ひますることなきこゝろのうちならんかし

一三オ6

つこもり比の月なき空にあまくもさへたちかきなりて

一七ウ4

はては山ちにまよひぬるそすへきかたなきや

一八ウ11

恨もなけきもせきやるかたなきむねのうちを

二ウ1

むすふともなきうたゝねのゆめ

一三ウ11

なきおもひのよもすからやむともなきゝぬたの音

一五オ2

たゝ一すちになきになしはてつる身なれば

一八ウ4

をのつからおもひしつむる時なきにしもあらねは

二ウ7

あとなきなみにねをやなまし

一七ウ6

うへなきものはと思ひつゝろのたけそ

一九ウ2

ちかのしはかまもいとかなき心ちして

二ウ10

ふりみふらすみさためなきころの空のけしきは

二オ6

つれなきよのあはれさもみつからきこえあはせたく

一四ウ3

↓はかなき(三例)・はかなく(二例)

↓ほどなき・ほどなく(五例)

日かすもうららかにてゝこほる所もなかりけるを

二〇ウ11

さもあさましくはかなかりける契りの程を

一オ10

なかゝきこえんかたなくて日かすふるいふせさを

一四ウ1

雲のいくへともなくおりかきなりてゆくさきも見えず 八ウ8
 さるへきつゝてもなくてみつからきこえさせす 三ウ6
 日ころふれととひくる人もなく心ほそきまゝに 一四オ1
 ともしひのかけはかりを友として…まつもしつ心なく 三オ5
 思ふ事なくてみやこのともにもうちくしたる身 一八オ1
 たゝいまはかゝしくうちそふ人もなくて 三オ3
 とにかくおもひわけにし事なくなにと又みやこへか
 へるらむとあちきなくものうし 三オ7・8
 うきをわするゝたよりもやとあやなく思ひたちぬ 一五ウ8
 行ずゑをおほつかなく恋しきこともさまゝなれと 一七ウ2
 ↓こよなく (二例)
 われなからさためなくたひのほとも思ひしられされと 三ウ9
 みわたさるゝほとゝの道なればさはりなく行つきぬ 八オ11
 こよひはつれなくてやみなまし 四ウ10
 人はみな何心なくね入ぬる程にやをらすへりいれは 六ウ8
 何となく 六オ8・一五オ11
 …なとなをさりなくいさなへと 一五ウ4
 いまさら身のうさもやるかたなく恋しければ 四ウ10
 うらめしからぬそのふしもなし 三ウ3
 それかとみゆるくさ木もなし 一八オ8
 …の中はかりにてくたしはてぬるはいとかひなしや 三ウ11
 はかなしなみしかき夜半の夢まくら 三ウ10
 いてきこえんかたなければ…なみたのみむせかへり 三ウ11
 宵ねすへきともゝなければ…ひとりうちふしたれと 一三ウ7

けちかくとふへき人もなければ…はるゝとゆくを 一六ウ7
 なき (接尾) ↓はしたなき (二例)
 なぐさ・み (慰) (四)
 …の中のすまるもみつゝなくさみ給へかし 三ウ2
 わひはつるなくさみにさそふ水たにあらはと 一五オ7
 ものおもふ事のなくさむにはあらねとも 一オ3
 なくなく (泣々) (副)
 なくゝかをとをひきいつるおりしも 三オ5
 なげ (投) (下二)
 身をもなけてんとおもひけるにや 七ウ2
 なげ (無) (形動)
 おほかたのよのなさけをすてぬなげのあはれはかりを 二ウ5
 ↓はかなげなる (三例)
 なげ・き (歎) (四)
 へ源氏 ↓
 なげきつゝ身をはやきせのそことたに 七オ11
 なげきなからはかなくすきて秋にもなりぬ 一五オ1
 はるゝきぬとなげきけんも思ひ出らるれと 一八オ9
 かりの世の夢の中なるなげきはかりにもあらず 二オ8
 ひとかたならぬ恨もなげきも 二ウ1
 こゝろからかゝるたひねになけくとも 一八オ9
 なげきわ・び (歎) (上二)
 へ源氏 ↓
 なげきわび身をはやきせのそことたに 七オ11
 なごり (名残)
 へ源氏 ↓
 なごりもいと心ほそくてこの御文をつくゝとみるに 三ウ3

とりわきたりける御思ひのなこりもいとくるしく
 日ころふりつるあめのなこりにたちまふ雲間の
 みやこのなこりもいつくをししのふ心にか心ほそく
 ものこになこりおほかる心地するにも
 なさ(無)
 だえてほとふるおほつかなさの
 かへらんほとをたにしらぬ心もとなさに
 過ぎつる日かすのほとなさに
 なさけ(情)
 手をひかへてみちひくなさけのふかさそ
 かつらのさと人のなさけにをとらめやは
 おほかたのよのなさけをすてぬなけのあはれはかりを二ウ5
 な・し(為・成)〔四〕
 〇才11
 三才2
 一五ウ5
 三才9
 二才8
 一七ウ1
 一七ウ2
 〇才2
 〇才6
 二ウ5
 二ウ4
 二才10
 一七ウ1
 一七ウ2
 〇才2
 〇才6
 二ウ5

△源氏▽

△源氏▽

△源氏▽

あらぬすまゐに身をかへたとおもひなしてとたに
 おもひなしにやこゝもかしこも猶あれまざりたる心ち三ウ9
 せきのし水もたえぬなみたとのみ思ひなされて
 こまやかにかきなされたるすみつき筆のなかれも
 なしはて(成果)〔下二〕
 三才10
 二ウ4
 二才10
 一七ウ1
 一七ウ2
 〇才2
 〇才6
 二ウ5

△源氏▽

なつか・し(懷)〔形〕

△源氏▽

はしらのあら／＼しきかなつかしからさりつるも
 せきもりのなつかしからぬおもゝちとりにくゝ
 はかなきくもさへなつかしくなりぬ
 など(何)〔副〕
 三ウ1
 三才3
 三ウ6
 二才10
 一七ウ1
 一七ウ2
 〇才2
 〇才6
 二ウ5

△源氏▽

などかくしも思ひいれけん
 など(等)〔副助〕
 〇才10
 二ウ6
 四ウ3
 四ウ9
 四ウ11
 五ウ4
 六才1
 六才8
 七才1
 七才4
 九才7
 九才11
 二ウ5
 三才8
 三ウ4
 三ウ6
 三才9
 三才11
 一五ウ3
 一七才7
 一七才8
 一八ウ4

△源氏▽

ともなる人々時雨しぬへしはやかへり給へなといへは
 みつからきこえあはせたくなとあれは
 かうまては思ひしらすそすきましなと思ひつゝくるに
 こよひはつれなくてやみなましなと思ひみたるゝに
 人二三人はかりして物かたりなとするに
 仏などの見え給つるにやとおもふに
 手ならひのほんこなとやりかへすつゐてに
 はさみはこのふたなどのほとなく手にさはるも
 かきをきつる文なともとりくしてをかん
 みのかさなときてさえつりくる女あり
 またくちろんなとをし給たりけるにか
 こゝかしこにせぬれいのをとなとをきくにつけても
 人しれすなみをわけし事なと只いまのやうにおほえて
 をのつからことのつゐてになとはかりきこえたるに
 みつからきこえさすなとなをさりにかきすてられ
 こせんなどこと／＼しくみゆるを
 かほしるきすいしんなとまかふへうもあらねは
 こまやかなる物かたりなとするつゐてに
 人はみぬへきさまなるなとなをさりなくいさなへと
 むつかしけなるものともを舟にとりいれなとする程
 あるひは水にたふれいりなとするにも
 松のこたちなと絵にかゝまほしくそみゆる

おなしかやゝともなときすかにせはからねと

ハウ6

さかさまになかるゝやうにみゆるなときまかはりて

一ノオ2

うちそふ人もなくてなときまゝととむる人も…

二ノオ3

ともすへきものともなとこれかれとさためて

三ノウ5

ひらのたかねやひえの山なとに侍る

三ノウ5

ところゝもりぬれたるさまなと…心とゝまるへくも

三ノウ11

なに(何)

△源氏▽

心ほそさなにゝたとへてもあかすかなしかりける

二ノオ10

かなしきことそなにゝたとふへしとおおほえぬ

二ノオ5

もりぬれたるさまなとなにゝ心とゝまるへくもあらぬ

三ノウ11

なにをかなとゝめんと見出したるけしきも

三ノオ3

なにごころ

△源氏▽

人はみな何心なくね入ぬる程に

六ノウ8

なにごと

△源氏▽

何事にかゆゝしくあらそひて

二ノオ7

なにと(何)〔副〕

△山家・日ボ▽

なにと又みやこへかへるらむとあちきなくものうし

二ノオ7

なにといふ〔連〕

△狂言▽

なにといふ心にかしたをたひくゝならして

九ノウ3

なにとて〔副〕

△源氏▽

何とて思ひたちけんとかやしきことかすしらす

一ノウ1

なにとなく〔何無〕〔連〕

△源氏▽

何となくつもりにける手ならひのほんこなと

六ノオ8

何となくこまやかなる物かたりなとするつゐてに

一ノオ11

なにびと(何人)

△源氏▽

これはなに人そあな心う

九ノオ10

なにゆゑ(何故)

△源氏▽

なにゆへかゝるおほあめにふられてこの山なかへは

九ノウ1

なぬか

△源氏▽

ひかりのほのかにみゆるは七日の月なりけり

五ノウ8

なびき(靡)〔四〕

△源氏▽

くれ竹のたゝすこしうちなひきたるさへ

三ノオ11

風になひくけふりのすゑもゆめのまへにあはれなれ

一ノウ1

なほ(猶)〔副〕

△源氏▽

火のひかりのなをほのかにみゆるに

七ノオ5

山ちはなを人のこゝちなりけるか

二ノオ7

心はこゝろとして猶思ひなれにしゆふくれのなかに

二ノオ11

さても猶うきにたへたるいのちのかきりありければ

一ノウ6

こゝもかしこも猶あれまさりたる心ちして

三ノウ10

なほざり(等閑)〔形動〕

△源氏▽

なをさりにかきすてられたるもいと心うくて

三ノウ7

人はみぬへきさまなるなとなをさりなくいさなへと

一ノウ3

なまし〔連・助動〕

△源氏▽

こよひはつれなくてやみなましなと思ひみたるゝに

四ノウ11

かゝらぬところにてやみなましかはいかにせまし

一ノウ7

なみ(波)

△源氏▽

人しれすなみをわけし事なと只いまのやうにおはえて

三ノオ7

おもひいつるほとにもなみはさきけり

三ノオ9

あとなきなみにねをやなかまし 歌
波あらきしほの海路

うみいとちかければみなとのなみこゝもとにきこえて
あらいそのなみのをとまぐらのをとおちくる

ゆめたにゆるせおきつしらのなみ 歌

なみだ (涙)

心に乱れおつるなみたををさへて

なみたをそふる水くきのあと 歌

たゝいひしらぬなみたのみむせかへりたる

まつかきくらす涙に月のかけも見えずとて

いとゝかきくらす涙のあめさへふりそひて

いとゝしきなみたのもよほしになん

つきせぬ涙のしつくはまとうつあめよりもなり

まつかきくらす涙のみさきにたちて

せきのし水もたえぬなみたとのみ思ひなされて

わかれにたえぬなみたとそみる 歌

いとゝなみたおちまさりてしのひかたく

なむ (係助)

かへすく夢こゝちなんしける

いとゝしきなみたのもよほしになん

おもひなからのみなんさるへきつるてもなくて 図

うちつけにものむつかしき心のくせになん

なむ (連・助動)

かへりなんともいはてふしぬ 歌

△源氏▽

一才 8

三ウ 7

三ウ 11

五ウ 11

九才 1

二ウ 4

一五才 5

一六才 4

一六才 7

一六才 9

一七才 11

△源氏▽

四才 6

二ウ 4

三ウ 5

三才 11

△源氏▽

六ウ 7

あしのゆくにまかせてはや山ふかく入なんと 歌
はかなきやとりもとめてゝうつろひなんとす

さすかひたみちにふりはなれなむみやこのなこりも

夜ふかくみやこをいてなんとするに

よるつをわすれていそきのほりなんとするは

たちはなれなんはさすかに心ほそくて

なやましさ (惱)

心つからのなやましさもうれへきこえんとにやあらむ

ならし (鳴) [四]

したをたひくならしてあないとおしくにと...

ならひ (習・慣) [四]

ねぬよのともとならひにける月のひかりまちいて...

とたえもあるましきやうにならひにけるを

夜ふかくかとをあけていつるならひなりければ

手ならひのほんこなとやりかへすつめてに

おほつかなさのならばぬ日かすのへたつるも

さすかならはぬひなのなかに

ならひはそ (習果) [下二]

いつはりにさへならひはてにけることもあるにや

ならひ (並) [四]

さとわかぬひかりにもならひぬへきこゝちするは

なり (成) [四]

物ことに心をいたましむるつまとなりければ

風さへ吹てものさはかしくなりければ

△源氏▽

二ウ 4

二ウ 4

九ウ 4

一才 4

一ウ 4

七ウ 10

六才 8

二才 8

一六ウ 9

二ウ 8

一五才 10

一才 7

三才 2

やうく心ちもをこたりさまになりたるを
やまひになりてかきりになりたるよしを

一四ウ 7
一九ウ 7・8
三〇ウ 11

ふはのせきになりてゆきたふりにふりくるに
たゝいまになりては心ほそきことのみおほかれと

一六ウ 2

このくにゝなりてはおほきなる川いとおほし
雲かくれたりつる月のうきくもまかはすなりながら

一七ウ 7
一五ウ 7

ともかくもなりなはわつらはしかるへければ
雲井はるかに心を送るしへとそなりける

一三ウ 1
一〇ウ 1

はるけきなかとにけるかな
いたくもたとらすなりにしや

一三ウ 1
一〇ウ 1

神な月にもなりぬ
あか月にもなりぬ

二〇ウ 5
一四ウ 1

しはすにもなりぬ
はつかしくもたのもしくもなりぬ

一四ウ 2
一六ウ 6

我かたへもかへらすなりぬ
しほくぬるゝほとになりぬ

一八ウ 9

さまくよのためしにもなりぬへく
うつきにもなりぬ

二〇ウ 6
一四ウ 5

はかなくすきて秋にもなりぬ
くたるへき日にもなりぬ

一五ウ 1
一五ウ 8

ほとなくあふさか山にもなりぬ
みのをはりのさかひにもなりぬ

一六ウ 6
一六ウ 11

されはさらんとすこしおかしくなりぬ
かのくにの中にもなりぬ

一八ウ 11
一八ウ 1

かくてしも月のすゑつかたにもなりぬ
これかれとさためてのほるへきになりぬ

一九ウ 4
三〇ウ 6
三ウ 6

はかなきくもさへなつかしくなりぬ
かしこくおもひしめるころもいかになりぬるにか*

三〇ウ 4

さたかにもおほえすなりぬる御おもかけさへ
さそふ水たにあらはと朝夕のこと草になりぬるを

一五ウ 10
一五ウ 8

これもむかしにはあらずなりぬるにや
みやこいてはるかになりぬれば

一八ウ 6
一八ウ 11

ことの葉のつゝきも見えずなりぬれば
夜もやうくほのくとするほとになりぬれば

三ウ 2
一八ウ 1

↓おもひなり(三例)
そゝろにうらめしきつまとなるにや

三ウ 1
一八ウ 3

なり(助動)

これやさはいかになるみの浦なれば

一八ウ 3

くるしくたへかたきとしぬはかりなり
しぬへき心地さへすればこゝによりゐたる也

一八ウ 6
一八ウ 11

つきせぬ涙のしつくはまとうつあめよりもなり
とてもかくてもねのみなきかちなり

一五ウ 6
一六ウ 3

かくてしもなかゝにしもあらぬさまなり
そゝろにみるもあわれなり

一八ウ 10
一八ウ 10

こゝろそうたてくかなしきものなりけるを
ほのかにみゆるは七日の月なりけり

三〇ウ 2
一ウ 10

夜ふかくかとをあけていつるならひなりければ
こわらはのおなしこゑなるとものかたりする也けり

一ウ 10
一ウ 8
一ウ 10
一八ウ 8

△源氏V

山ちはなを人のこゝちなりけるか

かの人しれすうらみきこゆる人なりけり

つとてに持たるはかりそたのもしきともなりける

うき世の夢をものつから思ひさますたよりなりける

かの御あたりなりしねにまよひたるこゝちするにも

はまなのうらそおもしろきところなりける

さもうちつけにあやにくなりし心まよひには

おもひしつめるこゝろもいかなりぬるにか

思ひますることなきこゝろのうちならんかし

おもへはあさましくよのつねならす

ありしなからの心ならましかは

これやかつらのさとの人ならんとみゆるに

もしのみやまの月ならて園

をしあけかたならねとゝあやにくなるこゝちすれは

まつならぬ木すゑたにそゝろにはつかしく

すみたかはらならねはことゝふへきみやことりもゝ

みやこのともにもうちくしたる身ならましかは

いとはなれまうきあはらやののきならんと園

心ならずも夢のかよひちたえ果ぬへし

さまゝむねしつかならず

人をみやまのはるかならねは園

↓ひとかたならぬ(二例)

其比こゝ地れいならぬことありて

御まへにもなる人々

二〇才 8

一三才 8

一四才 2

一四才 4

一四才 2

一六才 1

一ウ 7

五才 4

三才 7

四ウ 5

四ウ 8

九才 9

二才 2

三才 3

四ウ 8

一七才 3

一八才 1

三才 1

一九才 7

一三才 2

二才 11

三ウ 11

二ウ 5

かうらんのつまなるいはのうへにおりゐて

ともし火の残りて心ほそき光なるに

外なるともし火のひかりなれば筆のたちとも見えす

こわらはのおなしこゑなるとものかたりする也けり

すくおもふさまなるに

かりの世の夢の中なるなけきはかりにもあらず

命もあやうきほとなるを

すまさん人はみぬへきさまなる園

松にかゝれる枝心の色もほかにほなる心地して

あさましけるしつのをとも

↓あだなる(二例)

うき人しもとあやにくなるこゝちすれは

いかなるにか

おほきなる川

こゝかしこにすくをろかなるいゑゑとものなかに

あれたる庭の露かこちかほなる虫のねも

かたはらなる人うちみしろきたにせず

心つくしなることのみまされば

松にかゝれる枝心の色もほかにほなる心地して

何となくこまやかなる物かたりなとするつゐてに

とにかくにさはりかちなるあしわけにて

のとかなるみつうみのをちいたるけちめに

春ののとかかなるにゝほんこなとやりかへすつゐてに

↓はかなけなる(三例)

二ウ 9

六ウ 9

七才 9

九才 8

二ウ 3

一才 8

三才 1

一五才 3

二ウ 11

一七才 6

二才 4

五才 1・一才 3

一七才 7・一六才 10

一六才 5

一才 6

七ウ 8

六才 3

二ウ 11

一五才 11

二才 5

一六才 2

一六才 7

| | |
|---|--|
| にし山のもとなれはいとはるか成に ゆふつく夜のかけほのかなるに まとかなる月かけに所からあはれすくなからず むつかしけるものともを舟にとりいれなとする程 たしやうしひとへをへたてたる居ところなれは 外なるともし火のひかりなれは きた山のもといふ所なれは さてもかのところにし山のもとなれは みわたさるゝほとこの道なれは なきになしはてつる身なれは いまとちめはてつるいのちなれは あやしくはかなげなる所のさまなれは 一かたならぬねさめのもよほしなれは ころは神な月の廿日あまりなれは これやさはいかになるみの浦なれは あたりのくさもみなかれたるころなれはにや さまかはりていとおかしきさまなれと したはぬこゝちなれは われよりはひさしかるへきあとなれと ゆめのまへにあはれなれと かりそめなれとけにみやもわらやもとおもふには おほつかなく恋しきこともさま／＼なれと なりはて(成果)〔下二〕 身 <small>み</small> のゆくゑつるにいかになりはてんとすらん | 八才8 三才2 四才8 七才6 六才11 七才10 八才2 八才8 八才11 八才4 九才3 三才5 五才4 一五才10 八才3 八才8 九才3 三才8 三才9 一才2 八才8 七才3 四才6 |
|---|--|

△源氏▽

| | |
|--|--|
| なりひらのあそむ(業平朝臣) なりひらのあそむのはる／＼きぬとなけきけんも なりゆき(成行)〔四〕 いとゝみやこのかたはるかにこそはなりゆくらん 又なりゆかんはていかゝ なるみのうら(鳴海浦) なるみのうらのしほひかた音にきけるよりも… これやさはいかになるみの浦なれは なれ(慣・馴)〔下二〕 をこなひなれたるあまきみたちのよひあか月のあか… 猶思ひなれにしゆふくれのなかめにうちそひて まちなれしふるさとをたにとはさりし ふたはよりまいりなれにしかは…たのもしき心ちして ↓みなれず(二例) またきてなるゝおりもこそあれ なれども〔接〕 みおとろく人おはかるらめなれともかつらのさと人 のなさにをとりめやは に に(格助) 心に乱れおつるなみたをさへて ふし柴のとたえにおもひしらざりける 秋のかせのうき身にしらるゝこゝろそ | △古今▽△源氏 一才9 七才10 三才8 △新古今▽ 一才7 一才3 △源氏▽ 二才4 二才11 四才4 二才3 二才5 △日蓮遺文▽ 一才6 △源氏▽ 一才8 一才8 一才9 |
|--|--|

なにゝたとへてもあかすかなしかりける
 なにゝたとふへしともおほえぬ
 なにゝ心とゝまるへくもあらぬをみやるも
 うつまきにまうてゝんとおもひ立ぬるも
 御まへにともなる人々
 いはのうへにおりゐて
 松にかゝれる枝心の色も
 空のあはれにひころのをこたりをとりそへて
 かきみたすこゝろまよひにことの葉のつゝきも見えず
 ゆふやみにちきりたかへぬしるへはかりにて
 まくらにちかきかねのをとも
 なかみちにれいのたのもし人にてすへりいてぬるも
 鐘のひゝきに人しれすたのみをかくるも
 すいかいのおれのこりたるひまにたちかくるゝも
 まつかきくらす涙に月のかけも見えずとて
 月日にそへてたへしのふへきこゝちもせず
 手ならひのほんことやりかへすつゐてに
 あはれあさからぬなかに
 こゝにふし給へ^圖
 こゝによりゐたる也^圖
 ほとなく手にさはるも
 このふたにうちいれて
 かたはらにみゆるを引よせて
 みちの国かみのかたはらにゝかきつくれと

二才 10
 一六才 5
 二ウ 11
 二ウ 1
 二ウ 5
 二ウ 9
 二ウ 10
 三才 9
 三ウ 1
 三ウ 9
 四才 1
 四才 4
 四ウ 4
 五才 6
 五ウ 11
 六才 2
 六才 9
 六ウ 2
 六ウ 5
 九ウ 11
 七才 1
 七才 3
 七才 7
 七才 8

月なき空にあまくもさへたちかさなりて
 木の葉のかけにつきて
 あらしの山のふもとにちかく程
 はては山ちにまよひぬるそ
 かゝるおほあめにふられて^圖
 このやまのおくにたつぬへきことありて^圖
 かつらのさと人のなさけにをとらめやは
 こゝかしこにせぬれいのをとなとをきくにつけても
 こゝかしこにすこくをろかなるいゑゐるもの
 みねの松かせに吹かよひなかむるかとおもかけそ
 みし月かけは
 ゆふくれのなかめにうちそひて
 いとゝしきなみたのもよほしになん
 この川に水の出たちし世
 あれたる庭にくれ竹のゝうちなひきたるさへ
 さきにたちたるくるまあり
 かきくらす涙のみさきにたちて
 かのところに行つきたれは
 空のけしきも日ころにこえて心ほそくかなし
 とふのすかこもにたゝひとりうちふしたれと
 つとてに持たるはかりそたのもしき
 はかなけるかきねの草にまかななる月かけに所から
 あはれすくなからず

七ウ 4
 八才 3
 八ウ 7
 八ウ 10
 九ウ 1
 九ウ 8
 一〇才 6
 二ウ 5・6
 八ウ 5
 二ウ 10・10
 二才 11
 二ウ 4
 三才 7
 三才 11
 三才 5
 六才 4
 一三ウ 4
 一三ウ 6
 一三ウ 8
 一四才 2
 一四才 8・8

かりのいほにこゝろほそくもやとる月かけ 四〇一〇
 ねにまよひたるこゝちするにも 四〇二
 又ふるさとにたちかへるにも 四〇八
 かへにそむけるともしひの 四〇九
 あらぬすまゐに身をかへたとおもひなして 四一〇
 すさまじく身にしみとをる心ちするに 四一一
 をとに聞しせきのし水も 四一六
 音にきくけるよりもおもしろく 四一七
 わかれにたえぬなみたとそみる 四一九
 かすみにそれとたに見えす 四二〇
 いづくに野も山もはるくくとゆくを 四二七
 さすかならはぬひなのなちにおとろへはつる身も 四二八
 河のはたにおりゐて 四二九
 舟にとりいれなとする程 四三〇
 水にたふれいりなとするにも 四三六
 あとなきなみにねをやなかし 四三七
 あまのしわさにとしふりにけるしはかまとの 四三九
 みつうみのをちいたるけちめに 四四〇
 絵にかゝまほしくそみゆる 四四一
 なみこゝもとにきこえて 四四二
 たゝこゝもとにとそみゆる 四四三
 まくらのもとにおちくるひゝきには 四四四
 こゝろからかゝるたひねになけくとも 四四五
 風になひくけふりのすゑも 四四六

四〇一〇
 四〇二
 四〇八
 四〇九
 四一〇
 四一六
 四一七
 四一九
 四二〇
 四二七
 四二八
 四二九
 四三〇
 四三六
 四三七
 四三九
 四四〇
 四四一
 四四二
 四四三
 四四四
 四四五
 四四六

ゆめのまへにあはれなれ 一九一
 京に入日もあめふりいてゝ 二〇七
 いづるをかきりにとおもひかへすそ 二〇八
 みやこのやまにかゝるしらくも 二〇九
 身をうき草にあくかれし心も 二一〇
 よもきかそまにくちはつへき契こそはと 二一五
 よのわつらはしきにおもひなからのみなん 二一六
 かへらんほとをたにしらぬ心もとなき 二一七
 過ぎつる日かすのほとなきに 二一八
 いとせめてわひはつるなくさみに 二一九
 やうく心ちもをこたりさまになりたるを 二二〇
 たゝいまになりては心ほそきことのみおほかれと 二二一
 朝夕のこと草になりぬるを 二二二
 このくにゝなりては 二二三
 やまひになりてかきりになりたるよしを 二二四
 ふはのせきになりて 二二五
 日ころふりつるあめのなこりにたちまふ雲間のゆふ 二二六
 つく夜のかけ 二二七
 心ほそかりつるおもひにやまひになりて 二二八
 あしのゆくにまかせて 二二九
 人のゆくにまかせて 二三〇
 さても猶うきにたへたるいのちの 二三一
 くらきよりくらきにたたらむ 二三二
 いとものおそろしうくらきに夜もまたふかきに 二三三

一九一
 二〇七
 二〇八
 二〇九
 二一〇
 二一五
 二一六
 二一七
 二一八
 二一九
 二二〇
 二二一
 二二二
 二二三
 二二四
 二二五
 二二六
 二二七
 二二八
 二二九
 二三〇
 二三一
 二三二
 二三三

いひしにたかふつらさはしもありしにまさる心地するは

四才 9・9

ありしにかはるけちめもみえぬものから

二才 3

これかれとさためてのほるへきになりぬ

三才 6

ひえの山なとに侍る

三才 5

…とおほゆるほとに

六才 3

人はみな何心なくね入ぬる程に

六才 8

かきくらす雪まをしはしまつ程に

三才 5

くれはつるほとにゆきつきたれば

三才 9

あくるまゝにしほくとぬるほとになりぬ

八才 9

夜もやうくほのくとするほとになりぬれば

八才 1

同じ世ともおほえぬまでへたゝりはてにければ

二才 9

たゝあよみにあゆみよりて

九才 9

ゆきたゝふりにふりくるに

三才 1

一すちになきになしはてつる身なれば

八才 4

あながちに思ひいてられて

五才 10

あはれにかなしくてよろつをわすれて

一才 9

あやにくにわか心よりおもひたちていてぬれと

三才 8

いかに (九例)

二才 2

今さらにとりものはかたとそおもひしられける

二才 10

木々の紅葉色々に見えて

六才 7

うちつけに (二例)

六才 7

…といへはえにかなしきことおほかりける

二才 1

しほかまとものおもひくにゆかみたてたるすかた… (七才 10)

↓おもひのほかに (二例)

かすかに笛のをとの聞えくる

二才 1

つらさのかすくになみたをそふる水くきのあと

三才 6

いといたうかへりみかちにこゝろほそし

三才 3

いとこほりとちてさばかりかちにあやうかるへきを

二才 2

いとおもしろければすきかてにおりぬ

二才 8

↓げに (二例)

…とことほりに思ひたちぬる心のつきぬるそ

六才 4

こまやかにかきなされたるすみつき筆のなかれも

三才 10

この河の水さかさまになかるゝやうにみゆる

一才 2

↓さすがに (四例)

さたかにもおほえすなりぬる御おもかけさへ

五才 10

さまくになすけあつかはるゝほと

二才 7

しきりに身のありさまをたつぬれば

九才 5

しのひやかにうちたゝくをきゝつけたるには

五才 2

↓そぞろに (六例)

たゝいまになりては心ほそきことのみおほかれと

一才 2

↓ついでに (三例)

つねにより居つるはしらのあらゝしきか

三才 11

↓つひに (三例)

↓とにかくに (四例)

ふるさとはいとゝわすられぬるにやとみにもたゝれす

三才 1

↓ともに (二例)

かくてしもなか／＼にしもあらぬさまなり
なをさりにかきすてられたるもいと心うくて

↓にはかに(二例)

おほきなる川のとかになかれたり

さきはなやかにおひて

↓はるかに(三例)

さすかひたまちにふりはなれなむ

ひとひにほいとけにしかは

いと人すくなに心ほそけれと

↓ひとすちに(二例)

ひるはひめもすになかめ

↓ほのかに(二例)

まことにかの人をみやこはちかき心のみはかりにて

↓ままに(七例)

はま千とりむら／＼にとひわたりて

にはもせにうきをしらせしあきかせは

↓ものごとに(二例)

↓やうに(六例)

ゆたのたゆたにものをのみおもひくちにしはては

おり／＼にちりくることの葉もありしにこそ

に〔接助〕

△源氏▽

こゝるにもあらずいそぎいつるに

たひのほとも思ひしられされといとはず

…と思ひいつるにたゝそのおりの心ちして

一六ウ 9

二二ウ 7

一八ウ 11

二三ウ 6

二五ウ 4

二〇ウ 1

三〇ウ 6

一九オ 5

三ウ 1

一七ウ 9

二〇ウ 9

二オ 4

二ウ 5

二ウ 7

三ウ 10

三ウ 9

こしかたゆくさを思ひつゝくるに

…なと思ひつゝくるに

…と心をやりておもひつゝくるに

…なと思ひみたるゝに

…とおもふにはつかしくもたのもしくもなりぬ

…といふをきくに

これやさとはふにつらさのかす／＼に

物まうてせんとてのほりきたるに

ゆきたゝふりにふりくるにかせさへましりて

そのほとを人しれすまづに

火のひかりのなをほのかにみゆるに

…とみゆるに

やをらおきいてゝみるに

この所をみるに

かきつゝけておこせたるをみるに

人二三人はかりして物かたりなとするに

さしむかひたる心ちするに

物おそろしきこゝちするに

夜ふかくみやこをいてなんとするに

すさまじく身にしみとをる心ちするに

われなからうとまじきに

みなれすものおそろしきに

いとみ所おほかるに

この川に水の出たりしに

一オ 9

四ウ 9

五ウ 1

四ウ 11

六オ 1

三ウ 6

三ウ 6

一五オ 11

三オ 1

七ウ 11

七オ 6

九オ 9

五ウ 6

二ウ 2

一九ウ 9

五ウ 4

五ウ 11

六ウ 5

一五ウ 9

一五ウ 11

五オ 5

一七オ 9

二ウ 11

三オ 7

さすかめもあはすみしろきふしたるに
ときゝゐたるに

つくくとなかめいてたるに

閑屋ちかくたちやすらひたるに

人はみなねぬれと露まどろまれぬに

ひたちのみやの御すまゐ思ひいてらるゝに

ともし火の残りて心ほそき光なるに

すこくおもふさまなるに

春ののどやかなるに

にし山のふもとなれはいとはるか成に

ゆふつく夜のかけほのかなるに

にか〔連・助〕

いかにうつりいかにそめけるこゝちにかさも…

なにといふ心にかしたをたひくゝならして

いつくをしのふ心にか心ほそく思ひわつらはるれと

いつのとしにかあらんこの川に水の出たちし世

いかにさすらふる身の行ゑにかと…心ほそきことのみ

くちろんなとをし給たりけるにかなにゆへかゝる

おもひしつめるこゝろもいかなりぬるにかやをら…

まつほとすきぬるはいかなるにかとさすかめもあはす

いかなるにか心とゝまらす日かすふるまゝに

いつくにかあらんかすかに笛のをとの聞えくる

いつくにかとたつぬれは

何事にかゆゝしくあらそひて

△源氏▽

たれはかりにかとめとゝめかたければ

にき〔連・助動〕

いたくもたとらすなりにしや

おきわかれにし袖の露いとゝかこちかましくて

ものをのみおもひくちにしはては

猶思ひなれにしゆふくれのなかめにうちそひて

とにかくにおもひわけにし事なく

ふたはよりまいりなれにしかは

ひとひにほいとけにしかは

にくく〔難〕〔接尾〕

せきもりのなつかしからぬおもゝちとりにくゝ

にげいで〔逃出〕〔下二〕

入のてをにけいて給か

にけり〔連・助動〕

ねぬよのともとならひにける月のひかりまちいて…

一夜…のとたえもあるましきやうにならひにけるを

何となくつもりにける手ならひのほんこなと

うちとけて聞えかはしけることのつもりにけるほとも

雲井はるかに心を送るしるへとそなりにける

つらきいつはりにさへならひはてにけることも

はるけきなかとにけるかな

あまのしわざにとしふりにけるしほかまものの

つるにきえはて給にければ

いたくまはりはてにければ

△源氏▽

三才7

一ウ3

四才3

二才4

二才11

三才7

二ウ3

二ウ1

△源氏▽

三才3

△源氏▽

九才11

△源氏▽

一才4

一ウ4

六才8

六ウ1

二才1

二ウ8

三才1

一七ウ10

四才7

九才5

松にかゝれる枝心の色もほかに[＊]はことなる心地して
 かのところにはむめきたのかた月ころわつらひ給ける 二ウ10
 四オ6

よひには雲かくれたりつる月の 五ウ6

こゝもみやこにはあらずきた山のふもとゝいふ所… 八オ2

この世にはいつかはおほえん 八ウ3

おもふかたにはとをさかるらむ 八オ4

これもむかしにはあらずなりぬるにや 八オ5

いゑるものなかにはおなじかやゝともなと… 八ウ6

まへにはおほきなる川のとかななかれたり 八ウ10

まくらのをとおちくるひゝきには心ならずも夢の… 二ウ7

都をうしろにてこしおりのこゝちにはこよなく… 二オ1

人しれすこゝろはかりにはさてもいかにさすらふる 一オ3

ものおもふ事のなくさむにはあらねとも 一オ3

なりゆくらんとおもふにはいとゝなみたおちまさりて 二オ11

みやもわらやもとおもふにはかくてしもなかくゝに… 八ウ9

うちたゝくをきゝつけたるにはかしこくおもひ… 五オ3

にはかに(俄)〔副〕

にはかにうつまさにまうてんとおもひ立ぬるも 二オ11

にはかにいそきたつを 二オ1

にも〔連・助〕

神な月にもなりぬ 二オ5

こゝろにもあらずいそきいつるに 二ウ6

あか月にもなりぬ 四オ1

我にもあらずおきわかれにし袖の露 四オ2

△源氏▽

さとわかぬひかりにもならひぬへきこゝちするは
 しはずにもなりぬ 五オ10

ものおそろしかりける山人のめにもとかめぬまゝに 八オ5

身のぬれとをりたること伊勢のあまにもこえたり 九オ4

まちとるところにもあやしくものくるをしきもの… 二オ4

さま／＼よのためしにもなりぬへく 二オ6

おもひいつるほにもなみはさはきけり 二オ9

うつきにもなりぬ 二オ5

秋にもなりぬ 二オ1

くたるへき日にもなりぬ 二ウ8

ほとなくあふさか山にもなりぬ 二オ6

みのをはりのさかひにもなりぬ 二ウ11

みやこのともにもうちくしたる身ならましかは 二オ1

かのくにの中にもなりぬ 八ウ1

月のすゑつかたにもなりぬ 二ウ4

かりの世の夢の中なるなけきはかりにもあらず 二オ8

これは人をうらむるにもあらず 九ウ6

…とおもひつゝくるにもすへて思ひますることなき… 三オ6

…と心ほそく思ひつゝくるにもありしなからの心… 四ウ7

思ふにもいふにもたらず 九オ2・2

なかし夜のまといをおもふにもいとせめてかなし… 二オ10

夢のこゝちするにもいてきこえんかたなければ 三ウ10

つねよりもをとするこゝちするにもいつのとしにか 二オ6

ねにまよひたるこゝちするにもきとむねふたかる… 二ウ2

にや〔連・助〕

△源氏▽

- みなれすめつらしき心^ちするにも思ふ事なくて… 一七ウ 11
 そのことになこりおほかる心地^ちするにもうちつけに… 三〇オ 10
 あるひは水にたはふれいりなとするにもみなれす… 一七オ 8
 又ふるさとにたちかへるにもまつならぬ木すゑたに… 四ウ 8
 この御文つくく^くとみるにも日比のつらさはみな… 三ウ 3
 をのつかたのむる宵はありしにもあらず 一ウ 11
 おとろかしきこえたるにも…なをさりにかきすて… 三ウ 5
 さりとてとまるへきにもあらねは 一六オ 3
 いとゝわすられぬるにやとみにたゝれす 三オ 1
 いとうれしくもあはれにもさまゝむねしつかならず 三ウ 1
- そのほとのみきれにやまたほとふるもことはりながら 四オ 8
 かもちいさきわらはにやしのひやかにうちたゝくを 五オ 2
 有し夢のしるしにやとうれしかりける 六オ 5
 かくても人にやみつけれん 七ウ 7
 仏の御しるへにやとまてうれしくありかたかりける 二オ 3
 あくかるゝ心もよほすにやにはかにうつまきに… 二オ 11
 ならひはてにけることもあるにや同じ世とも… 二ウ 8
 水のまさるにやつねよりもをとすることゝちするにも 三オ 5
 そゝろにうらめしきつまとなるにや 三ウ 1
 おもひなしにやこゝもかしこも猶あれまさりたる心… 三ウ 9
 いたくもたとすなりにしにや打しける夢の通ひち… 一ウ 3
 いとゝわすれぬるにやとみにたゝれす 三オ 1
 これもむかしにはあらずなりぬるにやはしもたゝ… 一八オ 6

にん

人二三人はかりして物かたりなとするに

△源氏▽

- 三オ 5
 六オ 1
 七ウ 2
 二ウ 4
 一八オ 8
 一八オ 10
 五ウ 3

ぬ

ぬ(寝)〔下二〕↓ぬ

ぬ(不)〔助動〕↓ず

△源氏▽

- ぬぬよのともとならひにける月のひかりまちいて… 一オ 3
 かねてしらぬにしもあらさりしかと 一ウ 5
 さすかにたえぬ夢の心ちは 二オ 3
 かはるけちめもみえぬものから 二オ 4
 ならばぬ日かすのへたつるも 二オ 8
 ちきりたかへぬしるへはかりにて 三ウ 9
 たゝいひしらぬなみたのみむせかへりたる 三ウ 11
 君やこしもおもひわかれぬなかみちに 四オ 4
 さとわかぬひかりにもならひぬへきこゝちするは 五オ 10
 露まとろまれぬにやをらおきいてゝみるに 五ウ 5
 あはれあさからぬなかに 六ウ 2
 山人のめにもとかめぬまゝに 八オ 5

うちもやすめまゝに

おしからぬ命もたゝ今そ心ほそくかなしき

ハウ 6
ハウ 11

こゝかしこにせぬれいのをとをきくにつけても
とし月のつみもかゝらぬところにてやみなましかは
ひとかたならぬ恨もなけきも

二ウ 5
二ウ 7
二ウ 1

おほかたよのなぎけをすてぬなけのあはれはかりを

二ウ 5

同じ世ともおほえぬまでにへたゝりはてにければ

二ウ 9

うらめしからぬそのふしもなし

二ウ 3

其比こゝ地れいならぬことありて

三ウ 11

おもひかけぬたよりにて

三ウ 2

しきもさためぬとふのすかこもに

三ウ 8

まつならぬ木すゑたにそゝろにはつかしく

二ウ 8

一かたならぬねさめのもよほしなれは

二ウ 3

つきせぬ涙のしつくはまとうつあめよりもなり

二ウ 5

たのむへきことはりもあさからぬひとしも

二ウ 9

あらぬすまゐに身をかへたるとおもひなしてとたに

二ウ 6

かなしきことそなにゝたとふへしともおほえぬ

二ウ 5

せきのし水もたえぬなみたとのみ思ひなされて

二ウ 7

わかれにたえぬなみたとそみる

二ウ 9

さすかならはぬひなのなかに

二ウ 10

かへらんほとをたにしらぬ心もとなきに

二ウ 1

人しれぬ心の中のみさまくくるしくて

二ウ 2

かくてしもなかくゝにしもあらぬさまなり

二ウ 10

せきもりのなつかしからぬおもゝちとりにくゝ

二ウ 3

なにゝ心とゝまるへくもあらぬをみやるも

三ウ 1

したはぬこゝちなれは

三ウ 7

しのはぬ人はあはれともみし

三ウ 10

なくさむにはあらねとも

一ウ 3

いける心ちたにせねは

二ウ 2

おもひしつむる時なきにしもあらねは

二ウ 8

をしあけかたならねと

二ウ 3

かはしるきすいしんなとまかふへうもあらねは

二ウ 9

さりとしてゝまるへきにもあらねは

二ウ 3

すみたかはらならねはことゝふへきみやことりも…

二ウ 3

さすかにせはからねと

二ウ 6

とにかくにさはるへきこゝ地もせねは

二ウ 1

人をみやまのはるかならねは

二ウ 11

ぬ
〔助動〕

△源氏▽

やうく色つきぬ

一ウ 9

神な月にもなりぬ

二ウ 5

いとおもしろければすきかてにおりぬ

二ウ 8

あか月にもなりぬ

四ウ 1

しはすにもなりぬ

五ウ 2

夜もいたく更ぬとて

五ウ 4

はつかしくもたのもしくもなりぬ

六ウ 2

我かたへもかへらすなりぬ

六ウ 6

かへりなんともしはてふしぬ

六ウ 7

しほくぬるゝほとになりぬ

八ウ 10

みわたさるゝほと道のなれはさはりなく行つきぬ

ほとなくをくりつけてかへりぬ

一すちにうちもうれしく思ひなりぬ

うつきにもなりぬ

秋にもなりぬ

あやなく思ひたちぬ

くたるへき日にもなりぬ

ほとなくあふさか山にもなりぬ

みのをはりのさかひにもなりぬ

はる／＼きぬとなけきけんも

すしおかしくなりぬ

かのくにの中にもなりぬ

月のすゑつかたにもなりぬ

のほるへきになりぬ

はかなきくもさへなつかしくなりぬ

↓ぬべし・ぬらん

↓な・なまし・なむ

いまはかくにこそとおもひなりぬるよの心ほそさそ

うつまさにまうてゝんとおもひ立ぬるも

うきふるさとはいとゝわすられぬるにや

日比のつらさはみなわすられぬるも人わろき心の程

れいのたのもし人にてすへりいてぬるも

れいのまつほとときぬるはいかなるにかと

かしこくおもひしつめるこゝろもいかなりぬるにか

八才 11

二〇才 4

二〇才 2

二四才 5

二五才 1

二五才 8

二五才 8

二六才 6

二六才 11

二八才 9

二八才 11

二八才 1

二九才 4

二〇才 6

二二才 6

やをらすへりいてぬるもわれなからうとましきに

きたかにもおほえすなりぬる御おもかけさへ

ことはりに思ひたちぬる心のつきぬるを有し夢のし

るしにやとうれしかりける

人はみな何心なくね入ぬる程に

とくあけて出ぬるをとすれば

はては山ちにまよひぬるそすへきかたなきや

なにゆへゝこの山なかへはいて給ぬるそ

こゝろの中はかりにてくたしはてぬるはいとかひなし

朝夕のこと草になりぬるを

出ぬるみちすから

すみわひてたちわかれぬるふるさとも

これもむかしにはあらずなりぬるにや

はる／＼きぬとなけきけんも

あくかれし心もこりはてぬるにや

月のひかりまちいてぬれは

ことの葉のつきも見えずなりぬれは

人はみなねぬれと

そきおとしぬれはこのふたにうちいれて

もとのやうにいりてふしぬれと

夜もやう／＼ほの／＼とするほどになりぬれは

ほうりんのまへすきぬれと

さるへき人みなわたりはてぬれと

かゝるわたりをさへたてはてぬれは

三才 4

三才 10

六才 5・5

六才 8

七才 11

八才 10

九才 2

二才 10

二才 8

二才 3

二才 4

二才 6

二才 9

三才 5

一才 4

二才 2

二才 5

七才 3

七才 8

八才 1

八才 10

二才 4

二才 10

みやこいてゝはるかになりぬれは
おもひたちていてぬれと

かせさへましりてふき行もかきくれぬれは

↓にき・にけり

ぬべし〔連・助動〕

時雨しぬへしはやかへり給へ國

夢のかよひちたえ果ぬへし

さまくゝよのためしにもなりぬへく

さとわかぬひかりにもならひぬへきこゝちするは

たゝ今もいてぬへきこゝちして

すまさん人はみぬへきさまなる國

ぬらむ〔連・助動〕

つねよりもめとゝまりぬらんかしとおほゆるほとに

ぬれ〔濡〕〔下二〕

ところくもりぬれたるさまなど

あめのあくるまゝにしほくとぬるゝほとになりぬ

ぬれとほり〔濡透〕〔四〕

身ぬれとをりたること伊勢のあまにもこえたり

ね

ね〔根・嶺〕

はかなけなるかきねの草に

かひのしらねもいとしく見わたされたり

ひらのたかねやひえの山なとに侍る國

ね〔音〕

かこちはなる虫のねも

かの御あたりなりしねにまよひたるこゝちするにも

とてもかくてもねのみなきかちなり

おもひわひてねのみなかるゝを

あとなきなみにねをやなかまし國

ね〔不〕〔助動〕↓ぬ

ね〔寝〕〔下二〕

人はみなねぬれと露まゝとろまれぬに

↓うたゝね〔二例〕

こゝろからかゝるたひねになくとも國

宵ねすへきともゝなければ

ねぬよのともとならひにける月のひかりまちいてゝ

たゝひとりうちふしたれとゝけてしもねられず

宵のまよりせきもりのうちぬる程をたに

れいのうちぬるほととの鐘のひゝきに

ねいり〔寝入〕〔四〕

人はみな何なくね入ぬる程にやをらすへりいは

ねざめ〔寝覚〕

一かたならぬねざめのもよほしなれば

ねや〔寝屋〕

ねやちかききりくすのこゑ

△源氏▽

一オ7

一ウ2

一ウ3

三オ4

三ウ6

△源氏▽

五ウ5

一オ9

一ウ7

一オ3

三ウ9

一ウ2

四ウ4

△源氏▽

六ウ8

△源氏▽

一オ3

△源氏▽

一オ2

の

の〔格助〕

ねぬよのともとならひにける
 月のひかり
 あれたる庭の秋の露
 かこちかはなる虫のねも
 はかなかりける契りの程を
 宵のまより
 打しきる夢の通ひちは
 一夜はかりのとたえもあるましきやうに
 つき草のあたなる色を
 ふし柴のとたえにおもひしらさりける
 秋のかせ
 うちすくつかねのひゝきを
 夢の心ちは
 さたまなきころの空のけしきは
 いとゝ袖のいとまなき心ちして
 おもひなりぬるよの心はそさそ
 仏の御心の中はつかしけれと
 心つからのなやましきも
 ほうこんかう院の紅葉
 かうらんのつまなるいはのうへにおりゐて
 山のかたをみやれば
 木々の紅葉
 松にかゝれるつたの心＊の色も

△源氏▽

一オ 3 人しれすちきりしなかのことの葉を國
 一オ 4 こゝろのうならんかし
 一オ 6・6 たゝいまの空のあはれに
 一オ 7 ひころのをこたりをとりそへて
 筆のなかれも
 一オ 10 ことの葉のつゝきも見えず
 一ウ 2 日比のつらさは
 一ウ 3 人わろき心の程や
 一ウ 4 とふにつらさのかすゝに國
 一ウ 5 水くきのあと國
 一ウ 8 夢のこゝちするにも
 一ウ 9 かねのをとも
 一ウ 11 たゝいまのいのちを
 二オ 3 袖の露
 二オ 6・6 夢のこゝちなんしける
 二オ 7 むめきたのかた
 二オ 9 そのほとのみきれにや
 二ウ 2・2 御思ひのなこりも
 二ウ 4 あはれしるこゝろのほと
 二ウ 7 つれなきよのあはれさも國
 二ウ 8・9 うちぬるほと鐘のひゝきに
 二ウ 9 よのつねならず
 二ウ 10 あたなる身のゆくゑ
 二ウ 10・10 ありしなからの心ならましかは

三オ 4・4
 三オ 7
 二オ 9・9
 三オ 10
 三オ 11
 三ウ 1・2
 三ウ 4
 三ウ 4
 三ウ 6
 三ウ 7
 三ウ 10
 三オ 1
 三オ 2
 三オ 3
 三オ 5
 三オ 6
 三オ 8
 三オ 11
 三ウ 1
 三ウ 3
 三ウ 4・4
 三ウ 5
 三ウ 6
 三ウ 7

うきたる身のとかも

身のうさもやるかたなく

ひたちのみやの御すまゐ

いるかたしたふ人の御さまそ

立よる人の御おもかけ

山のは

七日の月なりけり

みし夜のかきりもこよひそかし^翻

たゝそのおりの心ちして

月のかけも見えずとて

有し夢のしるしにやと

手ならひのほんこなと

おり／＼のあはれしのひかたきふし／＼を

こなたのあるし

心のおにも

はさみはこのふた

はこふたにうちいれて

火のひかり

みちの国かみのかたはらに

ともし火のひかりなれは

筆のたちとも見えす

はやきせのそことたに^翻

つこもり比の月なき空に

きた山のふもとゝいふ所なれは

四ウ 8

四ウ 10

五オ 7・7

五オ 8

五オ 9

五ウ 7

五ウ 8

五ウ 8

五ウ 9

五ウ 11

六オ 5

六オ 8

六オ 11

六ウ 4

六ウ 6

七オ 1

七オ 3

七オ 5

七オ 8・8

七オ 9

七オ 10

七オ 11

七ウ 3

八オ 2

木の葉のかけにつきて

山人のめにもとかめぬまゝに

うつゝのことゝもおほえす

にし山のふもとなれは

さかのわたりまては

みわたさるゝほとどの道なれは

あらしの山のふもとに

むかへの山をみれば

ほうりんのみへすきぬれと

涙のあめさへふりそひて

伊勢のあまにもこえたり

みやこのかたよりとおほえて

かつらのさとの人ならん^翻

人のてをにけて給か^翻

身のありさまをたつぬれば

このやまのおくに^翻

なさけのふかさそ仏の御しるへにやとまて

ものくるをしきものゝさまかなと^翻

かつらのさと人のなさに

人のこゝちなりけるか

おもひのほかに

よひあか月のあかのを^{*}とたゝす

こゝかしこにせぬれいのをととなとを

とし月のつみも

八オ 3・3

八オ 5

八オ 7

八オ 7

八オ 10

八オ 11

八ウ 7・7

八ウ 8

八ウ 10

九オ 1

九オ 4

九オ 6

九オ 8・9

九オ 10

九ウ 5

九ウ 8

二オ 2・2

二オ 5

二オ 6・6

二オ 8

二オ 10

二ウ 4・5

二ウ 5

二ウ 6

| | | | |
|-----------------------|-------------|---------------------|----------|
| ふるさとのにはもせに | 二ウ 8 | よのわつらはしさに ㊦ | 三ウ 5 |
| ほけ三まいのみねの松かせに | 二ウ 9・9 | けふりののちのくもをたに ㊦ | 三ウ 8・8 |
| りやうしゆせん雲井はるかに | 二ウ 11 | こゝろの中はかりにて | 三ウ 10 |
| もしのみやまの月ならて ㊦ | 二オ 2・2 | をたきのちかき所にて | 三オ 2 |
| よのためしにもなりぬへく | 二オ 5 | くるまの中 | 三オ 10 |
| おもひのほかに | 二オ 6 | 所のさまなれは | 三ウ 5 |
| さすらふる身のゆくゑを | 二オ 7 | 暮はつる空のけしきも | 三ウ 6 |
| かりの世の夢の中なるなけきはかりにも | 二オ 8・8・8 | とふのすかこもに | 三ウ 8 |
| ななき夜のまとひをおもふに | 二オ 9 | みしかき夜半の草まくら ㊦ | 三ウ 10 |
| ゆふくれのなかにうちそひて | 二オ 11 | うたゝねのゆめ ㊦ | 三ウ 11 |
| せきやるかたなきむねのうちを | 二ウ 2 | うき世の夢も | 四オ 4 |
| いとゝしきなみたのもよほしになん | 二ウ 4 | いさよひのひかり待いてゝ | 四オ 6 |
| おほかたのよのなさけを | 二ウ 4・4 | まとのしとみたつものもおろさず | 四オ 6 |
| ちりくることの葉も | 二ウ 6 | かきねの草に | 四オ 8 |
| 露のいのちをもかけて | 二ウ 6 | をく露のいのちまつまのかりのいほに ㊦ | 四オ 10・10 |
| うき世の人のつらきいつはりにさへ | 二ウ 7・7 | 笛のをと | 四ウ 1 |
| ちかのしほかま ㊦ | 二ウ 9 | 露のいのちの庭のあさちふ ㊦ | 四ウ 11・11 |
| みちのくのつほのいしふみ ㊦ | 二ウ 11・11・11 | やむともなきゝぬたの音 | 一五オ 2 |
| あめのなこりに | 三オ 2 | ねやちかききりゝすのこゑのみたれも* | 一五オ 3・3 |
| 雲間のゆふつく夜のかけ | 三オ 2・3 | ねさめのもよほしなれは | 一五オ 3 |
| いつのとしにかあらん | 三オ 6 | ともしひのかけはかりを友として | 一五オ 4 |
| 中川の水 ㊦ | 三オ 6 | つきせぬ涙のしつくは | 一五オ 5 |
| くれたけのうらめしからぬそのふしもなし ㊦ | 三ウ 2 | 朝夕のこと草になりぬるを | 一五オ 7 |
| ことのつるてに ㊦ | 三ウ 4 | のちのおや | 一五オ 8 |

みやこの物まうてせんとて
 る中のすまゐも
 みやこのなこりも
 神な月の廿日あまりなれば
 あり明の光も
 かせのをとも
 いかにさすらふる身の行ゑにかと
 せきのし水も
 あふさかやまのやまみつは
 あふみのくに
 みやこの山をかへりみれば
 みちのほと
 いくつかの野も山も
 ひなのなかに
 われかのこゝちのみして
 みのをはりのさかひにもなりぬ
 河のはたにおりゐて
 あさましけなるしつのをとも
 みやこのかた
 過ぎつる日かすのほとなさに
 人々の行すゑを
 なるみのうらのしほひかた
 あまのしわざに
 みやこのともにも

一五才 10
 一五才 1
 一五才 5
 一五才 9
 一五才 10
 一五才 10
 一六才 2
 一六才 6
 一六才 8
 一六才 10
 一六才 11
 一六才 6
 一六才 7
 一六才 10
 一六才 10
 一六才 11
 一七才 5
 一七才 6
 一七才 10
 一七才 1
 一七才 2
 一七才 7・8
 一七才 9
 一八才 1

人しれぬ心の中のみ
 いかになるみの浦なれば
 みかはのくに
 あたりのくさもみなかれたるころなれば
 なりひらのあそむ
 かのくにの中にもなりぬ
 はまなのうらそ
 波あらきしほの海路
 おひつゝきたる松のこたちなど
 おちつきところのさまをみれば
 いゑゑものなかに
 みなとのなみ
 この河の水
 みやこのかたのみ
 あらいそのなみのをとも
 まくらのもとにをちくるひゝきには
 夢のかよひち
 ふしの山は
 風になひくけふりのすゑも
 ゆめのまへにあはれなれと
 こゝろのたけそ
 かひのしらねも
 しも月のすゑつかた
 みやこのかたよりも

一八才 2
 一八才 3
 一八才 5
 一八才 7
 一八才 9
 一八才 1
 一八才 1
 一八才 2
 一八才 3
 一八才 4
 一八才 6
 一九才 1
 一九才 2
 一九才 4
 一九才 6
 一九才 7
 一九才 11
 一九才 1
 一九才 1
 一九才 2
 一九才 3
 一九才 4
 一九才 5

とりのあと

ものむつかしき心のくせになん

あさまのはしら^國

都をうしろにてこしおりのこゝちには

たひのほとも

ふはのせきになりて

せきもりのなつかしからぬおもゝちとりにくゝ

ふはのせきもり^國

かゝみの山もくもりて

ひらのたかねやひえの山なとに侍る^國よそのなかめやかよふらん^國みやこのやまに^國

うきあはらやののきならんと

たえてほとふるおほつかなさのならばぬ日かすの…

はかなき水くきのをのつからゝろの行たよりもや^國

なさけをすてぬなけのあはれはかりを

ゆたのたゆたにものをのみおもひくちにしはては

↓れいの(七例)

もとのやうにいりてふしぬれと

夢のやうにみをきし山ちを

只いまのやうにおほえて

とりのあとのやうにかきつゝけて

↓かの・この・その

〔主格〕

一九ウ 8

二〇オ 10

二〇ウ 4

二〇ウ 7

二〇ウ 9

二〇ウ 11

二〇オ 3

二〇オ 6

三〇オ 7

三ウ 5・5

三ウ 7

三ウ 8

三オ 1

二オ 8

二ウ 2

二ウ 5

二オ 4

二ウ 8

ハオ 3

二オ 8

一九ウ 8

ものおもふ事のなくさむにはあらねとも

せきもりのうちぬる程をたに

秋のかせのうき身にしらるゝこゝろそうたてくかなし

ならはぬ日かすのへたつるも

すいかいのおれのこりたるひまに

雲かくれたりつる月のうきくもまかはすなりながら

仏などの見え給つるにやとおもふに

思ひたちぬる心のつきぬるそ…うれしかりける

むめかえの色つきそめしはしめより

うちとけて聞えかはしけることのつもりにけるほとも

ともし火の残りて心ほそき光なるに

はこのふたなどのほとなく手にさはるもいとうれしく

しやうし口より火のひかりのなをほのかにみゆるに

とのゐ人の夜ふかくかとをあけていつるならひなり…

ふりいてつるあめの…しほくゝとぬるゝほとになりぬ

あしのゆくにまかせてはや山ふかく入なんと

雲のいくへともなくおりかさなりてゆくさきも見えず

身のぬれとをりたること伊勢のあまにもこえたなり

あまきみたちのよひあか月のあかをたゝす

をのつからゝろの行たよりもやとて^國

かとちかくほそき川のなかれたる水のまさるにや

この川に水の出たちし世

くれ竹のたゝすこしうちなひきたるさへ

かすかに笛のをとの聞えくるかの御あたりなりし

一オ 3

一ウ 2

一ウ 9

二オ 8

三オ 6

五ウ 6

六オ 1

六オ 5

六オ 10

六ウ 1

六ウ 9

七オ 1

七オ 5

七ウ 9

ハオ 9

ハウ 5

ハウ 8

九オ 3

二〇ウ 4

二ウ 2

三オ 5・5

三オ 7

三オ 11

四ウ 1

猶うきにたへたるいのちのかきりありければ

一四ウ 6

なかきおもひのよもすからやむともなきゝぬたの音
人のゆくにまかせて夢ちをたとるやうにて

一五オ 2

しほかまとものおもひゝにゆかみたてたるすかた…
なりひらのあそむのはるゝきぬとなけきけんも

一六ウ 8

のとかなるみつうみのをちいたるけちめに
しほのさすときは

一七ウ 9

ふみとものあまたあるをみれば
人のおもふらんことゝものさはかしくかたはらいた

一八ウ 2

ければ

一九ウ 5

こよなく日かすのすくもこひしきこゝちするそ

二〇ウ 7

人を見やまのはるかならねは

二一ウ 7

山のはちかきひかりのほのかにみゆるは七日の月…

二二ウ 11

春ののやかなるに

二三ウ 7

文かきつくるすゝりのふたもせて有けるかかたはら

二四ウ 6

にみゆるを引よせて

二五ウ 5

松かせのあらゝしきをたのもし人にて

二六ウ 8

こわらはのおなしこゑなるとものかたりする也けり

二七ウ 7

そのころのちのおよとかのたのむへきことはりもあ

二八ウ 6

さからぬひとしも

二九ウ 5

つねにより居つるはしらのあらゝしきかなつかし

三〇ウ 4

からざりつるも

三一ウ 3

の(野)

△源氏▽

いつくの野も山もはるゝとゆくを

三二ウ 2

のき(軒)

△源氏▽

いとはなれまうきあはらやのきならんと

三三ウ 1

のこり(残) [四]

△源氏▽

ともし火の残りて心ほそき光なるに

三四ウ 9

すいかいのおれのこりたるひまにたちかくるゝも

三五ウ 6

のち(後)

△源氏▽

きえはてんけふりののちのくもをたに

三六ウ 8

そのゝちは身をうき草にあくかれし心もこりはてぬ

三七ウ 4

るにや

のぢ(野路)

△山家▽

あふみのくにのちといふところより

三八ウ 10

のちのおや(後親)

△源氏▽

そのころのちのおよとかのたのむへきことはりもあ

三九ウ 8

さからぬひとしも

△源氏▽

のどか(なり) (長閑) [形動]

△源氏▽

のとかなるみつうみのをちいたるけちめに

四〇ウ 2

まへにはおほきなる川のとかなになかれたり

四一ウ 11

のどやか(なる) (長閑) [形動]

△源氏▽

春ののどやかなるに何となくつもりにける手ならひ…

四二ウ 7

ののしりあ(ひ) (喧合) [四]

△枕▽

かしかましくおそろしきまでののしりあひたり

四三ウ 3

のほり(上) [四]

△源氏▽

よろつをわすれていそきのほりなんとするは

四四ウ 10

これかれとさためてのほるへきになりぬ

四五ウ 6

(のほりきたる(上来)(四))

みやこの物まうてせんとてのほりきたるに

のみ〔副助〕

我心のみそかへすくうらめしかりける

たゝいひしらぬなみたのみむせかへりたる

心つくしなることのみまされば

ゆたのたゆたにものをもおもひくちにしはては

よのわつらはしさにおもひなからのみなん因

たゝいまになりては心ほそきことのみおほかれと

みちすからまつかきくらす涙のみさきにたちて

せきのし水もたえぬなみたとのみ思ひなされて

とてもかくてもねのみなきかちなり

われかのこゝちのみしてみのをはりのさかひにもな

りぬ

おもひいてゝ名をのみしたふみやことり因

人しれぬ心の中のみさまくくるしくて

みやこのかたのみ恋しく

よるは夜すからものをのみおもひつゝくる

おもひわひてねのみなるゝを

みやこはちかき心のみはかりにていつるをかきりにと三ウ2

は

は(端)

山のはちかきひかりのほのかにみゆるは

△源氏▽

五ウ7

は(葉)

ことの葉

木の葉のかけにつきて夢のやうにみをきし山ちを

ふたはよりまいりなれにしかは

は〔係助〕

打しきる夢の通ひちは一夜はかりのとたえもあるまし

をのつからたのむる宵はありしにもあらす

とりはものかは因

さすかにたえぬ夢の心ちはありしにかはるけちめも

さためなきころの空のけしきはいとゝ袖のいとまなき

うきふるさとはいとゝわすられぬるにや

日比のつらさはみなわすられぬるも

いひしにたかふつらさはしもありしにまさる心地する

立よる人の御おもかけはしもさとわかぬひかりにも

ならひぬへきこゝちする

こよひはつれなくてやみなまし因

こよひはいとさひしく物おそろしきこゝちするに因

人はみなねぬれと

人はみな何心なくね入ぬる程に

人はみなおきさはけと

人はこゝまでおもひやはよる因

人はみぬへきさまなる因

しのはぬ人はあはれともみし因

こゝもとはいとあやしととかむる人もあれば

△源氏▽

三オ4・三ウ1・二ウ6

八オ3

二ウ2

△源氏▽

一ウ3

一ウ11

二オ2

二オ3

二オ6

二ウ11

三ウ4

四オ9

五オ9

四ウ10

六ウ4

五ウ4

六ウ8

一五ウ11

一四ウ5

一五ウ3

三オ10

八ウ2